第二章　シュトルム・ウント・ドランク

——疾風怒濤の季節

1　学園の創業成る

昭和四十九年六月半ば、土曜日のひるさがり、富士見ヶ丘の横浜国立大学正門まえに、一台の大型バスが停車した。中から降り立ったのは、老年の紳士とその夫人たちとおぼしい四十人ちかくの一団。正門を入った正面に立ちはだかる三階建ての本館を、人びとは食い入るように見上げた。

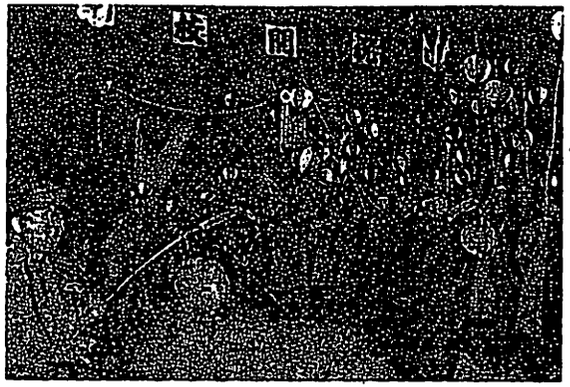
「白堊の殿堂もすっかり灰色になっちまったねえ。」

「あれから、もう五十年だからなあ……」

「保土ヶ谷へ移ったあとはどうなるのかしら？　これが見納めってわけねえ。」

高商第二回生（昭和三年卒業）のクラス会の一行であった。高商の後身である国大経済学部、経営学部と、教育学部のキャンパスとなっていたここ富士見ヶ丘の学舎は、四十九年八月一日から、全学統合地の保土ヶ谷区常盤台に完成した新しいキャンパスに向かって、移転を開始した。九月下旬から、保土ヶ谷での新学期がはじまる。

こうして、五十年の風雪に耐えた〝白堊の殿堂〟の使命はおわった。その間、ここに入りここから巣立ってい



開校記念提灯行列

った幾千の若ものたちの喜びと悲しみのすべてをそのうちに秘めながら。二回生たちは、富士見ヶ丘への別れを惜しみながら、保土ヶ谷の新キャンパス見学ヘバスを走らせて行った。

〝白亜の殿堂〟は、この人たちが高商の二年生に進級した大正十五年春に完成した。その年の十月二十一日には、時の文部大臣岡田良平、神奈川県知事、横浜市長など朝野の名士を招いて、開校式が盛大に催された。その夜は、学生たちの提灯行列が街々をねり歩いた。正門には「祝開校」のアーチが取りつけられ、教室には学生たち思い思いの趣向をこらした飾りつけが行なわれて、それから十月末までの約十日間は、名士学術講演会、大運動会、音楽大会、弁論大会はじめ、運動各部、文化各部の多彩な記念行事がくりひろげられ、横浜の街の人びとが、学内せましと見物に集まったものである。

この年四月に入学した高商三回生（昭和四年卒業）のひとり、M・Sは後日、「私が入学許可証をもらって嬉嬉やいろいろの届出書を差し出しに行ったときは、教務課がのちの商品実験室にあり、あまりピカピカにきれいなので、はだしでおそるおそる入っていったことを覚えている。私が出た中等学校も震災でやられたため、ひどい仮屋で過ごしたから、当時高商の建物の立派なのには特に感銘が深く、入学式の日などは、本当に涙ぐむほどうれしかった」と記している（『横浜高等商業学校二十年史』、高商第三回生・武藤正平「三回生の思い出」より）。

富士見ヶ丘へ登って行く坂の途中からふり仰ぐと、白亜の表面は陽ざしを受けて白く照り輝き、そのあいだを

等間隔に数条、ガラス窓をうがった線が黒くタテに走るシンメトリーの美しさが何ともいえなかった。教室のほうに入っていくと、リノリウムを塗った廊下の緑色が新鮮に目にうつる。正門玄関を入った中央部は、千余点の商品標本が、ガラス張りのいくつもの陳列ケースにならべられた商品標本室であり、さらに、一クラス約五十名の全員が実験を行なうことのできるほどの広さと設備を持った商品実験室があり、建物の左右両翼部には、それぞれ準備用の小部屋を付属させた理科教育用の階段教室が配置されていた。これらの商品関係の施設や階段教室は、開校当初の約二年間商品学を教えた横山秀専任講師の基本設計に成るものであった。

横山講師は高商の開校当時、東大工学部の応用化学科を卒業したばかり。同じころ東京商大（いまの一橋大学）を出てすぐ横浜の教官となり、以来国大昇格後も長く母校で教え、経済学部長も勤めた渡辺輝一教授とともに、当時まだ二十代も半ばの最年少教官であった。この若い横山講師に、田尻校長は、商品実験、理化学教室関係の基本設計を命じたのであった。横山は、かつて自分が学んだ東大の化学実験室をそのまま基本設計に取り入れた。こうして、旧制官立大学の理学部ないし工学部にしかなかった化学実験施設が、経済の専門学校である横浜高商に装備されることになったのである。

その横山講師は、大正十五年春のあのストライキ未遂事件――三・一会事件の直後、自ら辞表を提出して学園を去った。横山には商品学担当の教授への途が予定されていたが、三・一会事件のさい、かれは学校の規則の運用に手心を加えることに終始反対し、結局学生側の要求をのんだ校長の態度をあき足りないものとして、自らの考え方に忠実に、出処進退を明らかにしたものであった。弘明寺の高工での仮住まいこのかた、最年少教官どうしとして、ことさら横山と親しくしていた渡辺輝一教授は後日、そのときの模様をつぎのように記している。

「その晩（注：三・一会事件解決の夜）であるらしい。横山君は辞表を書いた。翌日の教官会議であったか、そ

れが発表された。同君は、校長への警告を、ながい巻紙に墨痕淋漓、たくましい率直な文章でしたため、辞職理由の説明とした。」（『昭三会々報』――高商第二回生の会報――第七号、渡辺翠一「浜の同僚だれかれのおもいで」より）

横山講師はこれを機に実業界に転進して、成功をおさめた。この事件なかりせば、今日の実業家横山はありえなかったかもしれない。

三・一会事件では学生のなかにも、学生大会の意向とは反対の信念を吐露したK・Kがあった。「君は君、我は我也、されど仲よき」（武者小路実篤）、一回生のT・Aが後日、そのころを追想して引用した言葉である。意見の違い、考え方の対立が、そのままゲバ棒によるたたき合いや殺し合い、あるいは陰湿な追い出し策謀などには、絶対につながらない時代であったのだろう。

学園の外ではこの後、治安維持法のもとに共産党に対する弾圧がますますきびしく、昭和三年（一九二八年）の三・一五事件、翌年の四・一六事件と大規模な検挙があい次いで行なわれ、文部省はいわゆる思想善導、学生の赤化防止の姿勢を強めて、昭和三年には省内に学生課を設置、それが翌昭和四年に学生部に拡充されるといったあゆみが急速化する。一方、大正九年（一九二〇年）の第一次大戦後の恐慌以来、慢性的な不況下にあった日本経済は、昭和二年の金融恐慌を経て、昭和四年（一九二九年）には、ニューヨーク株式の大暴落をきっかけに世界をおおった、あの大恐慌の波浪に巻きこまれ、以後産業活動は沈滞、とりわけインテリ失業者が続出して、就職難〝学校は出たけれど……〟の世相が深まっていく。また、このような国内の行きづまりを、中国大陸への侵略によって打開しようという軍部、右翼の力がしだいに頭をもたげ、昭和五年（一九三〇年）には、金解禁と軍縮を推進した浜口雄幸首相が、右翼青年に狙撃される事件が起こった。疾風怒濤の季節がはじまっていたのである。

だが、富士見ヶ丘の学園のなかでは、昭和二年六月に学校新聞が創刊され、また、すでに大正十四年から開始

された対商工野球定期戦は、キャンパス・ライフの中心として、また横浜市民を二分するコミュニティの一大行事として、ますます青春の血をわき立たせるものとなっていった。このほか、対東京商大専門部総合競技定期戦、国際連盟学生支部の発足、外国語劇の上演など、運動、文化各部の活動はしだいに発展して、若ものたちの情熱がきらめき燃焼する場は深く大きく広がりつつあった。ちょうど十八世紀の後半、シラー、ゲーテ、ヘルデルなどの人たちによって、ドイツに新しいロマン主義の旗が激しく打ちふられた、シュトルム・ウント・ドランクの時代のそれのように。そして、少なくとも学園の内部では、さまざまの思想、意見の違いを抱擁しながら自由の灯はともりつづけたというべきであろう。

さて、三・一会事件などをめぐる上記のような生みの苦しみを味わいながら、学園の創業はしだいに完成し、本館竣工の翌昭和二年三月には、本館の裏手、グラウンド側に体育館ができ上がった。跳び箱、鉄棒はもちろん、鞍馬、吊り輪といった近代体操に必要な用具をほとんど装備し、体育専門以外の学校では、やはり当時日本一を誇る施設であった。東京高等師範学校研究科を卒業してすぐ横浜高商に赴任してきた、若き日の下津屋俊夫助教授の基本設計に成るものであった。下津屋はこの体育館を基盤に、近代体操の教育と普及につとめ、のち昭和七年には、ロスアンゼルスで開かれた第十回オリンピック大会に、日本体操選手団の総監督として参加するにいたる。

昭和二年の十二月には、南北二棟、八十名収容の寄宿舎が竣工、「富士見寮」と名づけられて翌昭和三年四月から開寮された。この年入学した第五回生のうち、遠隔地からやってきた八十名が第一回の寮生となった。

こうして充実してきた施設のなかで、田尻校長は〝信頼の人となれ〟のモットーを柱に、若ものたちの教育を進めていったのである。

2　信頼の人となれ

——田尻常雄と鈴木逸治——

大正十五年十月二十一日の開校式の席上、田尻校長は岡田文部大臣を前にその式辞のなかで、次のように横浜高商の教育方針を明らかにしている。

「本校はいかなる主義を目標としているかということは、（中略）一言にしていえば、すべてを信頼し得る人物を養成することを主眼といたしております。独立自営たると、他に使用せらるるとを問わず、自らを深く信ずるとともに、他より安心して全任せらるる人物を養成することを期待しておるのであります。かかる人物たるには品性高潔、思想穏健なるとともに、進歩的な商業社会の進運に適応するだけの智能と技倆とを有し、かつ、いかなる劇務にもたえうる健康を有すること等、あえて喋々を要せざるところであります。」

英語をよくする田尻校長は、以来、入学式にさいし、あるいは卒業式に当たって、常に“To be a reliable person”と、また“refined gentleman”たれ、とも学生たちに説いた。上記の式辞のなかでは、産業社会の人材需要に結びつけて具体的な説明がなされているが、それは一種の方便に過ぎず、もともとこれは人倫社会に通用する個人の人格の完成をめざして説かれたものであり、学生たちもそのように受けとってきた。それは、明治時代の「富国強兵」「忠君愛国」ともなんらの結びつきがなく、また、昭和十年（一九三五年）前後から今次大戦の終末にいたるまで、学園の外を吹き荒れたいわゆる〝国体の明徴〟に結びついた「尽忠報国」「滅私奉公」とも、元来は何のかかわり合いもないものであった。

完成直後の「白亜の殿堂」

それはむしろ「国家」の時代であり、「文明」の時代であった明治に対して「社会」と「文化」の世代であった大正期のデモクラシーの土壌から生まれいでたものであり、そのころ日本に移入されて花開いたドイツ新カント学派の人格主義と、同根のものというべきであろう。それはまた〝ハイカラ〟好みといわれたほど強い国際志向性を持った、田尻の個性が強くにじみ出た言葉でもあった。

田尻常雄は熊本に生まれ、育った。熊本は明治以降、キリスト新教の外国人ミッション活動の日本におけるセンターのひとつとなったところであり、洋学実習のさきがけとなった伝統を持つ。田尻はそこで少年時代を熊本英学校に学び、のち、日本の産業革命がほぼ完成して対外貿易が本格化しつつあった明治三十年代の前半に、東京高商専攻部（のちの東京商大）を卒業、一時期東京の大倉商業学校で教鞭をとったのち、長崎高商教授となり、英国留学後、同高商校長に就任、横浜にくるまでその職にあった。

田尻の国際マインドは、青年時代に外交官を志したことにもあらわれている。また、横浜高商の校長となってからも、弘明寺の高工内仮校舎での一年間、昼食がおわるとほとんど毎日のように、長崎からつれて来た米人英語講師デイヴィスを校長室に招き入れ、三十分ぐらい英語でのフリー・トーキングをたのしみにしていたこと、学校が富士見ヶ丘に移ってから、教官食堂に雇い入れたコックは、日本郵船の国際船仕込みの、当時一流の洋食調理士であったことなどに、その面目躍如たるものがある。

このような校長にひきいられ、幕末以来の開港地で、当時日本一の国際港であった横浜という土地柄を背景として、横浜高商はその開校以来、海外に向けて大きく開かれた学校であった。こうしてみると、リライアブル・パーソンたれ、といい、あるいは、リファインド・ジェントルマンたれ、という田尻のモットーも、ひとり日本の社会のみならず、広く国際社会の規範に適合する、個人の人格育成を意味した、リベラルな内容のものだったと解していいだろう。

当時横浜高工では「三無主義」を掲げた煙洲・鈴木達治校長が、徹底した自由主義教育を果敢に実行していた。かれは学生自身の自覚とイニシャティブ、今日の言葉でいえばモティヴェーションが教育の根本であるとして、無試験、無採点、無賞罰を「三無主義」とし、いっさいの試験を行なわず、したがって採点ということもなく、学生の表彰、処罰もいっさいやらなかった。しかし、それは自由放任を意味するものではなく、学生と接する日常がすべてこれ教育、日常の指導こそ大切、という信念であり、かれ自身の書いたものによると、「要は学生と一心一体となって、瞬時も目を離さない、ということである。常に目新しい何ものかを学生に与える ということ」であった（鈴木達治著『煙洲残筆』）。

かれは自己の教育方針を「自由啓発主義」とも称したが、昭和初年、日本の満州侵略が頭をもたげはじめてか

らは「自由主義は表面に顔を出すことは許されなかった。（そこで）自由の下に二字を添加して、自由啓発主義と改め、世の中をカムフラージュした」ものであったと、戦後述懐している（『横浜国立大学工学部五十年史』三十六ページ）。鈴木の「三無主義」も、田尻の〝信頼の人となれ〟も、ともにリベラルな教育として、同根から発しているということができるだろう。こうした鈴木校長の人柄が、高工の学生ばかりでなく、弘明寺の街の人びとの心もとらえ、そこから生まれた暖い空気が、さいしょの一年間を高工ですごした、高商の教職員や学生をも包んだのであった。

無類のタバコ好きであったところから煙洲と号した鈴木校長は、田尻校長よりは数年の年長、少年時代京都の同志社に学んで新島襄の感化を受け、明治三十二年東大化学科を卒業、その後、第二高等学校（いまの東北大学）、広島高等師範学校（いまの広島大学）、東京高等工業学校（いまの東京工業大学）の各教授を経て、大正九年（一九二〇年）、横浜高工創設とともに初代校長に就任した。同志社に学んだのちしばらく、熊本の英学校で教鞭をとっており「いま一、二年私が早ければ、同校で田尻少年を教えたはずである。わずかの違いで、この秀才を私の門下に加ええなかったことは、実に残念至極である」と、後日かれは記している（『横浜高等商業学校二十年史』、回想録）。

そして、このふたりの校長は、高商開校後の一年間、仲よく高工の門を出入りしていた。鈴木校長は高工創設当初、その「三無主義」を打ち出すのに一策を案じた。それが自由主義を基調とした、当時としては破天荒の方針であっただけに「学校一覧」のようなもので公然と表明したのでは、文部省の許可がえられないだろうと考えた。そこで、大正九年十月の開校式の日に、時の中橋徳五郎文相や滑浦奎吾枢密院副議長らを招き、その式辞のなかでこれを宣言、文相から一言の批評もなかったところから、これが黙認されたものと解して、押しとおしてしまったのである（前掲『煙洲残筆』）。それから六年たった高商の開校記念式典の日、岡田良平文相らを前にして

やはり式辞のなかで、〝信頼の人となれ〟を宣明した田尻校長の脳裡には、そうした鈴木校長の故事が思い浮かべられていたのではなかろうか。

すでに、田尻校長は昭和三十二年、また煙洲先生は同三十六年、世を去り、両翁に直接ききただすすべはもはやない。しかし、戦後、高商も大部分の旗幟に対する学生の出欠チェックを廃止、これが国大経済・経営両学部に引き継がれたことも加わって大学昇格後の両学部の卒業生のなかには、「三無主義」が高商以来の両学部の伝統であると思っているものがあるほどである。高商、高工のリベラリズムが同根だったからであろう。

このようにして横浜高商は、田尻校長の国際的に開かれた自由主義教育のもと、常時、専任、非常勤をあわせ数名の外国人教師を持ち、外国語教育にすぐれた学校であり、また、十名内外の少数の学生に対して、教官が毎週一、二時間ずつ専門学科の指導を行なう、いわゆるゼミナール制を開校以来採用した特色のある学校として、その声価を高めていくのである。

3　浜の早慶戦　その一

――高商・高工野球定期戦――

横浜国大の学生食堂には名物ばあさんがいる。〝みのや〟のおばさんこと、渡辺文枝さんだ。富士見ヶ丘の本館がまだ工事中の仮校舎時代から、いやそのまえの、高商一回生が弘明寺の高工に仮住まいのときから、学生たちにパンや牛乳をあきない、こづかい銭を借りられたり、身の上相談の相手になったり、終戦直後荒廃の一年間を除き約五十年、雨の日も風の日も学生食堂内の店にすわり、学生たちと喜怒哀楽をともにしてきたばあさんだ。

もう七十歳代のなかばをこえ、目が少し不自由になって、店のきりもりは若い人たちに委せてすわっているが、高商以来の卒業生たちにとっては、いまでもなつかしい「みのや」の〝おばさん〟なのである。

「わたしは学生さんが好きでねえ」と目を細めるおばさんは、大正年間にご主人を助けて弘明寺にちかい通町三丁目にパン屋の店を開き、大正十一年から高工にパンを入れていた。それが大正十三年、高工のなかに高商が仮設されると、いつしか〝高商派〟になってしまった。翌十四年春、高商が富士見ヶ丘の本拠に移転すると、学生のあとを追うようにして高商キャンパス内に出店を開くようになり、今日にいたったというわけ。

富士見ヶ丘に移った当座は、白堊の本館はまだ工事中で、のちに学生控所と食堂になる木造の建物は、仮教室に使われていたから、おばさん夫婦も野天に店を出し、おひるの時間だけパンを売っていた。「毎日十一時キッカリに通町の店を出て、南太田のほうへ屋台を引いてきたから〝時計のパン屋〟と地元の新聞にも書かれたくらいだった」と、のちにおばさんは語っている。

その「みのや」のおばさんを、決定的に〝高商派〟にしたのは、浜の早慶戦といわれた高商対高工の野球定期戦だった。

第一回の定期戦は、大正十四年七月二日、新山下球場で行なわれた。七月一日の横浜開港記念日を期して行なう予定だったのが、雨のため翌々日になったものだ。以来、昭和三年の第四回戦まで、この定期戦は開港記念日に開催されることになる。開校当初、まだ一年生（二回生）しかいなかった高商の学生たちが、まず野球部づくりからそのキャンパス・ライフの設計をはじめたことは、先きにも述べたとおりだ。仮住まい中の弘明寺から富士見ヶ丘までかよって、練習に次ぐ練習の苦労を重ねたが、翌十四年には富士見ヶ丘に移り、二回生が入学してきて、新しい選手も補充されたところで、この年の五月、まず、高工とのあいだに小手調べの一戦を行なった。

第1回野球定期戦・高商側応援団

高工グラウンドで行なわれたこの前哨戦は、六回戦までやって、10対10の日没引き分けにおわったが、先輩高工と五分に勝負できた高商陣営は、この試合で自信を強めて、高工に対し正式に対抗試合を申し入れ、七月に第一回定期戦開催というはこびになったものだ。

こうして両校チームとも猛練習を開始、一方、両校の応援団も勢ぞろいして、両者の協定により、高工側は白、高商側は赤の、それぞれ長旗（のぼり）、リーダー用旗、鉢巻きを使用することになる。源平の合戦さながらである。高工応援団が、キャンパス所在地にある弘明寺の大提灯を借り受ければ、高商応援団は、副団長に選ばれた一回生のY・Kが、土地の事情にくわしい強味を発揮して、震災で焼け残った永田町、根岸、本牧、神奈川方面から、二十数個の太鼓をかり集めてくる。

女学生の獲得がまた、両校応援団の張り合うところとなった。女学校にポスターを張りにいって、その応援を取りつけてくるのだ。学校の歴史の古い高工は、たびたび音楽会などを開いて、フェリス和英女学校（いまのフェリス女学院）の生徒をひきつけていたから、高商側はフェリスはすでに敵陣営とみて、一回生

のM・Sらが、神奈川県立の横浜第一高女（いまの県立平沼高等学校）や紅蘭女学校（いまの横浜雙葉高等学校）などを走りまわって応援を頼み込んだ。こうして、洋装が制服のフェリス、紫の着物に袴の紅蘭、木綿の着物に袴の県立高女などの女学生たちが、定期戦のスタンドに色どりを添えることになる。

高工の地元の大岡町、高商のある南太田町の両青年団が、それぞれ高工、高商を支持してせり合ったことはもちろん。高工側の領域に店舗を持っている「みのや」に、ある日、大岡町の青年団の威勢のいいお兄さんがやってきて、おばさんに宣言した。

「おまえさんとこは高商びいきだそうだナ、これからパンは買ってやらないゾ」

「ああ、買ってもらわなくてもいいよ、高商の学生さんが買ってくれるから」

売り言葉に買い言葉、若かったおばさんも負けずにやり返した。おかげで、高工への出入りも自然やめるようになり、また、高工の姉妹校であった神奈川県立商工実習学校との商売もやめてしまった。おばさんの妹さんが、やはり高工近くの通町でビリヤードを経営、そこは場所がら高工生のたまり場になっていたので、妹さんは高工ファン、一家親族が両派にわかれる熱狂ぶりだった。

こうして「みのや」とおばさんは、高商学生と運命をともにする一生を歩むことになったが、やがて、伊勢佐木町などの商店街でも、高商派、高工派の色わけができるようになった。学生のたまり場も、森キャン（森永キャンディ・ストア）は高工生、不二家は高商生、おでんやの「しまや」は高商、「野毛おでん」は高工、とわかれるようになっていく。定期戦は、文字どおり横浜市民を二分する浜のお祭りになっていったのである。

こうして大正十四年七月二日に行なわれた第一回定期戦では、4A対3で高商が惜しくも敗れ、翌十五年七月一日の第二回戦は4対5で高商に凱歌があがり、昭和二年七月一日の第三回戦は、1対0で高工の勝ち、翌年の

第四回戦は2対4で高商の勝利と、二勝二敗の対スコアで推移した。ところが、翌昭和四年にこれまでの一回勝負を三回戦に改めようという高商の提案に高工側が反対して、折れ合いがつかず、とうとう同年と昭和五年の二年間は中止のやむなきにいたり、定期戦の復活は翌六年を待たなければならないことになった。

4　浜の早慶戦　その二

――富士ヶ丘の詩人たち――

定期戦は、富士見ヶ丘にかずかずの詩人を生んだ。この一戦に青春をかけた若ものたちの情熱が、おのずから格調高い歌となって結実したといったほうが、むしろあたっていよう。教務課の事務官で初代野球部監督だった武石弥彦は「霎金港の野に乱れ、臥竜ひとたび地にはえば」ではじまる応援歌を、そして「高商、高商、横浜高商は野球が強い」と民謡調の高商音頭を、自ら作詩した。第一回定期戦のころ、武石自身まだ二十九歳の血気さかりであった。二回生の乙咩逸雄は応援歌「港の岡の若みどり」を作った。三回生の吉田（現姓石川）利夫は、昭和三年、三年生のとき応援団長に推され「髑髏を包む皮ならず、血潮をたたふる肉ならず」の〝髑髏〟の歌を自ら作詩して、士気を鼓舞した。

この吉田については、この年、定期戦に先き立つ応援団結団、野球部選手激励会の席上、壇上に立って演説中、感きわまって尺余の日本刀を抜き放ち、自らの二の腕に切りつけて、満場の息をのませたというエピソードが残っている。前年敗退した雪辱のいくさを前にしてのことである。受難のキリストのようにあごひげを長く垂らした吉田応援団長の、この血染めの決意が、若ものたちの心をゆさぶり、さらに天にも通じたか、この年は高商側

に勝利の栄冠が輝いた。

このように、毎年四月の新学年がはじまると、五月ごろに、校長、野球部長の先生以下、全校の学生が講堂に集まって応援団の結団式、さらに野球部選手激励会が催され、そこでは、声涙あふれる激励と答辞がかわされ、決意が披瀝される。そして、野球部は猛練習を開始、その他の全学生は、休み時間や放課後にリーダーの振る旗や手拍子に合わせて、応援歌や拍手の練習という毎日がはじまるのである。このようにして夏がやってくるころまで、野球定期戦を軸としてキャンパス・ライフがくり広げられるパターンは、太平洋戦争がはじまり定期戦が中止されるまで、ほとんど変わるところなくつづけられた。

船　途

そして、プラタナスの芽かげから初夏の陽ざしがあふれるばかりに降りそそぐ、本館裏庭の応援練習のつどいで、昭和四年ごろから若ものたちに愛唱されたのが、あの「輝く白堊」の歌である。昭和四年当時、三年生であった四回卒業生の越村信三郎、のちに母校の教官となり、国大昇格後も経済学部長、学長を勤めた越村教授の若き日の作詩であり、同級生の故森（のちに加藤と改姓）道三、佐藤繁蔵のふたりが、これに曲を付したものだ。不幸にして、前記のようにこの年は野球定期戦が中断されてしまったが、同じ年の十月に、正富河洋作詩、山田耕作作曲により制定された校歌――〝気高く清き富士が嶺よ〟とともに、その後、学生たちにいちばんよくうたわれた歌であり、卒業後も長くかれらの耳に残っ

ている歌である。

森、佐藤のふたりは、国鉄保土ヶ谷駅から学校の裏門にのぼってくる当時の通学路を歩きながら、この歌を作曲した。ときはまさに早慶戦を中心にした学生野球の全盛時代。大正の末期に六大学野球戦が成立、ラジオの実況放送も開始されて、早慶戦の日は神宮球場に七、八万の大観衆が集まったばかりか、ラジオからも、早稲田の〝紺碧の空〟慶応の〝若き血に燃ゆる者〟の両応援歌が流され、ファンの胸を躍らせた時代だった。ふたりは、こうした歌のものまねではない、ほんものの富士見ヶ丘メロディを生み出すべく、保土ヶ谷から白堅の殿堂を望む小路をそぞろ歩きしながら、曲想をねりにねった。その結果生まれたのが、あの明朗、はつらつとした「輝く白堅」の曲だったのである。

この通学路は当時、春さきには背々とした麦畑にかこまれて、菜の花が黄色く咲きみだれ、秋の晴れた日には、駅を降りて切り通しを出ると、右手はるかに富士山が純白の姿をくっきりとうかべていた。途中には、馬頭観世音のほこらなどもあり、のどかな田園と大自然の息吹きにつつまれていた。学校まで歩いて三十分ちかくかかり、雨や吹雪の日は辛かったが、後年佐藤は、亡友森と「輝く白堅」の曲への追想をこめて、この路を〝花咲ける小路〟と呼んでいる（『富丘会報』第十四号、高商第四回生・佐藤繁蔵「花咲ける小路・思い出の曲」）。

昭和四、五年ごろまで、東京方面からの通学生はだいたい、国鉄で保土ヶ谷駅まできて、この〝花咲ける小路〟を往き来した。横浜駅までいっしょに乗るフェリス女学校や神奈川県立高女の女学生とロマンスの花を咲かせたものもいる。あらかじめ乗車する車両をしめし合わせておいて、車中つかの間のデートをたのしんだものである。

震災でメチャメチャにやられた横浜の市電網が整備拡充されたのは、昭和三年後半から四年にかけてであり、

いまの京浜電鉄が、横浜駅から南太田以遠につながったのは、昭和六年も暮れのことで、足の便は限られていた。そこで、桜木町の駅から学校まで、三キロもあろう道のりを、毎日テクテク歩いてくる蹴のものもあらわれた。四回生のM・Mがそれで、毎朝、富士見ヶ丘にのぼり切る手まえあたりで、授業開始の予備鈴にせきたてられ、学校の正門まで坂をかけあがったりしたものだ。

春さきの授業はとかくねむ気を誘われるが、M・Mは、無理にでも背すじを伸ばしていなければならなかった。かれのまえが三塁手、うしろがピッチャーと、クラスの机の前後を野球選手のクラスメートにとりかこまれていた。定期戦を控えた猛練習の疲れで、ふたりともさかんに舟をこいでいるから、先生の質問の受け手は、もっぱらM・Mというめぐり合わせになった。居眠りするわけにはいかなかったのである。定期戦のかくれた応援戦力？　ということだったにはちがいない。

5　学校新聞成る

——学園の文化活動　その一——

学校新聞第一号は、田尻校長の許可を待ちきれずに、学生側の強行突破のかたちで発行された。昭和二年六月、高商第二回生が最上級の三年になってまもなくのことである。横浜毎朝新報社で活版印刷したタブロイド版八ページ建て、六月三十日付発行の刷り上がりを持って、発起人の代表でもあった二回生のS・Sは、必死の思いで磯子間門の校長官舎を訪れた。野球定期戦は七月一日にせまっている。それに間に合わすために強行発行もせざるをえなかったのだ。すでに、学内の一部には配付を開始している。どうしても校長の事後承諾が

ほしかった。S・Sは黙って新聞創刊号を校長の面前に差し出した。案のじょう校長の怒りが爆発した。

「なんということをする！　君たちは卑怯じゃないか。あれほど事情を説明して、ほんのしばらく待ってくれといっておいたのに、ガリ版刷りならまだしも、私にだまって、本印刷までしてしまうとは……」校長はそういって絶句した。S・Sは黙って頭を下げるほかはない。長いこと時間がたったような気がした。校長はやがて、S・Sの書いた「発刊の辞」の穏健な調子に目をとめ、これはだれが書いたか、どんな連中が委員になっているか？とききはじめて、懸念していたようなラディカルなものでないことに、安堵したようだった。

「仕様がない。この発刊の辞を忘れずに、責任を持ってやるんだゾ。」

やっとのことで承諾の意思表示が出た。S・Sはほうほうの体で逃げ出した。玄関先で「定期戦にはぜひ勝ってくれ」と校長がいうのにも「ハイ、きっと勝ちます」と半分うわの空で答えながら。「今日もなお、思い出してゾッとする一幕であった」と、のちにS・Sは記している（前掲『横浜商工・横浜高商定期野球戦史』高商昭和三年卒・坂本四郎「対高工野球戦と高商新聞」による）。

前述のように、大正十四年の暮れから十五年のはじめにかけて、京都大学社会科学研究会関係の学生に対し、治安維持法適用第一号としての大検挙が行なわれる事件などが起こって、文部省は学生の思想対策を強化し、とくに学生新聞に対しては、いわゆるアジ・プロの道具になりかねないとして、きわめて警戒的な態度だった。そんなところから、大正十五年開かれた全国高商校長会議でも、文部省から、以後学校新聞は発刊しないように、という「内訓」があったばかりだった。「内訓」というのは、当世風にいえば、さしづめ「行政指導」ということになるだろう。しかも、この会議で田尻校長は議長役をつとめていた。他の校長連のまとめ役として、文部省の内訓を了承したかたちになっていたわけだ。同校長は当時、官立高商校長のなかでは最古参者であり、以来、

学報編集

常に高商校長会の代表格であった。戦後の国大昇格後も横浜が、旧官立高商系十国立大学経済学部長会議の常任議長校となっているのは、こうした伝統によるものだろう。とにかく、こういう校長のおヒザもとで、いきなり学校新聞の発刊が強行されたのだから、校長が怒るのも無理はなかった。

これに先き立ち、学生側は、四月下旬に三年生の有志が新聞発行の議をねり、学生間の賛成をえたのち、横浜毎朝新報社で印刷を引き受けてもらい、当時生徒監の岩本啓治教授に発刊申請書を出した。その後財源問題で行き悩み、経営の専門家の古舘市太郎教授にアドバイスを求めたりしたが、学友会総務部長の小幡孫二教授に相談した結果、当時学友会誌を年二回発行していた雑誌部の予算をわけ、学友会誌を年一回発行にして、残り一回分の財源で新聞を発行することで問題は解決、最終的に校長の許可の段階で、文部当局や高商校長会議との関係上待ったがかかったという成り行きであった。

しかし、学生側はもはや引っ込みがつかない。野球定期戦も間近い。そこで、前記のように、六月三十日付第一号の発行を強行し、第一面に、主筆に選ばれたS・Sの発刊の辞、A・Sの筆になる発刊にいたるまでの経過報告で、自重と責任をもって発行に当たるむ

ねを強調する一方、第五面は、野球定期戦に向けて、応援団の檄文でほとんど全面を埋めたのである。同時に、定期戦の勝利を期して号外発行の手配も行なった。

三年生（二回生）のO・HとO・Tのふたりが取材や割付などの主任となり、横浜毎朝新報社とのあいだに、号外は約三千部、大きさは四分の一ページで片面刷りとし〝高商勝つ〟の見出しの予定記事は前日に印刷しておき、試合がおわったらスコアを刷り込む、という手はずを整えていたのである。七月一日、定期戦のあと新山下球場からくり出す高商陣営勝利のパレードの先頭に立って、伊勢佐木町筋の人びとにこの号外を配ってあるく。やがてパレードはうた声も高らかに、富士見ヶ丘の坂をのぼって学校に着くと、夕やみせまる校庭ではかがり火が赤赤と輝き、学生たちは勝利の冷酒をあおって円陣を組み、さらに勝どきを挙げつつ、来年の必勝を誓い合う――O・Hらの脳裡にはそうした光景がまざまざと浮かんで、期待に胸がふくらんだ。

すでに大正十四年の一月から『横浜高工時報』という学校新聞を出していた高工側では、翌年の第二回野球定期戦のころから、同時報社同人が社名入りのそろいのハッピを着込み、頭には豆しぼりの手ぬぐいで鉢巻きといういなせないでたちで、腰には新聞社から借り受けた鈴をチリンチリンと鳴らし、試合中にガリ版刷りした場内号外まで配っていた。高商新聞も、対抗上張り切らざるをえない。

ああ、しかし、時に利あらず。昭和二年の第三回野球定期戦は、1対0で高商軍が敗れ去った。さあ、ことだ。O・HとO・Tはすぐさま横浜毎朝新報社に走って、いまはむなしく紙くずと化した号外を引き取り、タクシーに積み込んだ。

「さて、これをどうするかです。勝った記事ですから一枚も残すわけにはいきません。考えたあげく学校まで持ち帰り、不審がる小使いさんたちを説得してボイラーに投げ込んだのです。二人でポロポロ涙が出てきて仕方

なかったことを思い出します。」後日、O・Hはこのように回想している（前掲『定期野球戦史』、高商昭和三年卒・岡沢治彦「昭和二年の定期戦」から）。

こんな悲喜劇があったのち「高商新聞」問題は、田尻校長が、官舎に乗りこんできたS・Sにも念を押したし、自重を誓ったその他の学生たちの誠意もくみ取れたとみえて、事態が好転していった。校長はひそかに高商校長会議のメンバーや文部省当局への了解工作をやってくれたらしく、『横浜高商新聞』の題字で四号まで発行された学校新聞は、昭和二年十一月二十五日発行の第五号から『横浜高商学報』と改題することで、最終的に校長との話し合いがついた。『横浜高商学報』という新しい題字は、校長みずから揮毫してくれた。退学処分覚悟で強行創刊に踏み切ったS・Sら発起人首謀者も、これでホッと胸をなでおろした。元来リベラリストだった田尻校長の側にも、かなりの柔軟性があったればこそ、ことは円満に解決できたのであろう。こうして、翌昭和三年には、発行元の学友会雑誌部が学報部と改称され、同年十二月二十日発行の第十三号からは、いまの新聞紙大、四ページ建てとなり、以来、戦時中の休刊やむなきにいたるまで、『学友会誌』年一回（これは昭和六年十月から『不二見ヶ丘』と改題）、学報年八回発行のペースで、新聞発行がつづけられることになる。

しかし、その後の道程もけっして平坦なものではなかった。創刊主筆のS・S自身がつぎのように記している。

「号を重ねるうちにいろいろ苦労があった。ラディカルな主張の投稿に自重を要望すれば、保守的だの学校当局迎合だのと突き上げる。文芸欄に匿名執筆した作品が、人妻の姦通を内容としているとて問題になり、生徒監の岩本先生を悩ませた。結局『主筆たる私の責任だから』といって、執筆者の氏名を明かさずに頑張り、『今回限り勘弁してやる。校長には生徒監として自分が謝罪しよう』との情ある処置に泣かされた。県の特高課に出頭して威圧的いや味をならべられたこともある。財政不如意で広告を自らとりに出かけたが、あるク

リーニング屋で、あまりしつっこく頑張っておやじさんにどやしつけられ、ほうほうの体で帰ったりした。」（前掲『定期野球戦史』、「対高工定期戦と高商新聞」）

昭和四年六月二十日発行の『学報』第十七号は、文部省が学生の思想取締りのため、近く大臣官房に学生部を設ける、というニュースを報道するとともに、「火山灰」というコラムでは、同年文部省が学生のいわゆる赤化防止、思想対策のため、大学高専各学校に配付すべく追加予算で十万円を計上した「思想善導費」をヤリ玉にあげ、「思想善導費を十万円計上しなければならぬ大学があれば、また一方、どんぶりひとつで善導される学校や、すき焼きでなにされる高校もある。善導だ、取締りだといってさわいでいれば、首がつながり、めしが食える」と、痛烈な一矢をむくいている。また、同じ号の「編集室」は、「われわれは、ほかに、『宗教把握の必要』、創作に『お嬢さん』等、実にわが編集局においても歴史的のものとみられる好二篇を、検閲のために葬り去らねばならなかったことを非常に遺憾とする。現在われわれの頭上に落ちる学校当局の検閲は、無理解といわれる官憲のそれよりもさらにきびしく輪をかけたもので、二重の桎梏なのである」と、悲痛な抗議の叫びをあげている。学報部長として指導に当たっていた下田礼佐教授に向けられたもので、上記のような四囲の情勢のなかで〝検閲〟する側も辛かったに違いなく、同教授はさぞかし苦汁をかみしめながら、この抗議の編集後記を読んだことであろう。同教授も、すでにこの世の人ではなくなった。

そして、翌昭和五年七月八日発行の第二十五号では「自由自治の行方は？　失なわれる学生」という見出しの二面トップ記事で、同年六月文部省が開催した全国高等学校校長会議の決議事項を、次のように伝えている。

▽学校新聞発行に関する件、高等学校において生徒新聞を発行することは、現下の情勢に鑑み弊多しと認む。

▽寄宿舎、生徒に自治的生活を営ましむるは、もとよりこれを妨げずといえども、学校監督のもとに行なわしむるを要す。

▽学級代表者会議、学級代表者のみをもって会議を組織し、学校または校友会等に関する決議を許さず。

▽生徒大会、これを認めず。ただし、学校において必要と認めたるときはこの限りにあらず。

軍部、右翼の活動がしだいに活発化し、翌昭和六年九月、満州事変勃発へ向けての胎動が激しく高まりつつあった時期である。

6　高商名物外語劇

——学園の文化活動　その二——

横浜という土地がらもあり、とにかく創設の当初から、インタナショナルなマインドを持った学園であった。大正十三年高工内仮校舎での開校早々、学友会各部の組織が一応形だけはつくられたころから、こうしたマインドの萌芽があらわれていた。間借り生活の不自由さと、百三十名あまりの一年生（一回生）しかいない小世帯のため、各部がこれといった活動もできかねていたなかで、学生有志による国際連盟協会の学生支部が早くも結成され、同年十一月二十二日に発会式を挙げたのである。前記「三・一会事件」の中心人物のひとりだった、一回生総務部幹事I・Tの組織活動によってできたものだった。

同学生支部は発会式と同時に、早大教授内ヶ崎作三郎氏の講演「国家人と国際人との調和」ほか一氏による講演会を催し、翌十四年には、新渡戸稲造博士らを講師に招いて、二度にわたる講演会を開いた。その後も、各高商に設置された学生支部が東京商大（いまの一橋大学）に集まって、模擬国連を開催、横浜はカナダの役になって

第一次大戦後世界の中心課題となっていた金本位制や通貨価値安定の問題、あるいは軍縮の問題をめぐって、国際的討論のシミュレーションをやってのけたものである。同支部はその後国際経済研究会となり、昭和十二年に一時中絶したことがあるが、以来第二次大戦中にいたる約二十年のあいだ学園の文化活動にその足跡を残している。

「巡回講演」に出発

講演部も、毎年名士講演会や学生の弁論大会を開くほか、前記のように、直接地域住民に呼びかける巡回講演も行なっていたが、昭和四年ごろになると、こうした学生の活動に対しても官憲の眼はことのほかきびしく注がれていた。そのころ講演部長は財政学担当の岡野鑑記教授（のちの高商校長）になっていたが、その年、同教授が例によって講演部員たちを引き連れ、厚木、小田原、宇都宮、前橋、長野、松本などの方面へ巡回講演に出かけたときのことである。

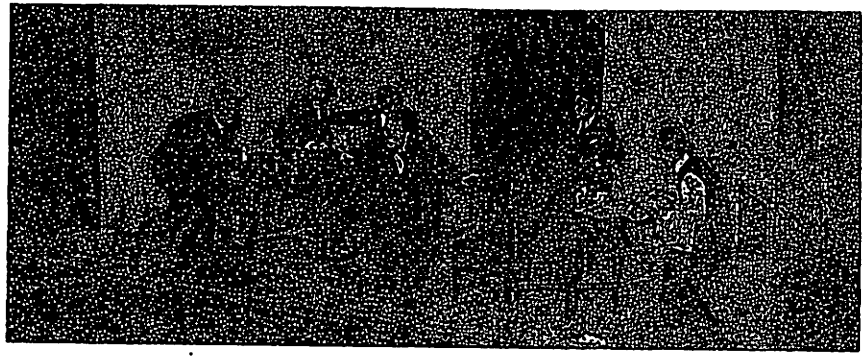
「なにしろそのころ、治安維持法改悪に反対して旧労農党代議士山本宣治が右翼のテロに倒れた直後のことで、言論統制がとくにきびしく、小田原の小学校講堂で時局学術講演会をひらいたときには、聴衆の数はわずか五、六人だったのに、警官が十名あまり会場にはいってきて、警察署長が演壇のわきにサーベルを立てて陣どり、学生弁士が二言三言しゃべりだすと、大声で『弁士中止！』とどなって、講演会の進行をメチャメチャにした。いまから考えると、まったく想像をこえる言論の抑圧であった。こんなときのあと始末はぜんぶ講演部長の肩にかかってきたのである。岡野博士は、学生がどんなラディカルなことをいってもすこしもとがめず、かえって青年の客気を愛し、これらの学生を官憲の手からかばった。」

当時二年生の講演部員だったのちの越村信三郎教授は、このように記している（神奈川大学経済学会『商経論叢』岡野鑑記博士古稀記念号、越村信三郎「岡野博士のバイタリティ」から）。

話は少しさかのぼるが、昭和二年には、当時三年生（二回生）の講演部員Y・YやA・Tらが中心となって、日本大学で行なわれていた模擬国会を高商でもやろうと画策、その政治的な色彩に田尻校長が難色を示したので討論会のかたちでこれを開催したりした。この討論会に総理大臣の役をやらされた、前記の『横浜高商新聞』主筆S・Sは、野党側に立ったA・Tから「内閣不信任」を突きつけられ、これに対し「国会解散」の対策がとっさに思いつかずに、大あわてさせられたと、後日述懐している。

毎年秋の開校記念祭に、高商名物として横浜市民の人気をさらった外語劇も、忘れてはならないキャンパス・ライフのメモリアルだ。横浜高商が開校以来、常時数名の外人教師を擁して〝語学に強い〟学校だったことは、さきにも述べた。日本人の語学教官でも、英語では、開校当初から教えられた河村重治郎教授、翌年から来られた西村稠、伊東弥の両教授、英語通信文の担当で略称コレポンが後年そのニックネームとなった光井武八郎教授、フランス語の時田清教授、スペイン語では、昭和五年から教えられた岡田峻助教授と、当代一流の諸先生がそろい、外語劇はこうした人びとの指導による日ごろの研究が花ひらく、晴れの舞台でもあった。

公演まえは担当の教官も、文字どおり寝食を忘れての力の入れかただった。昭和二年秋シラー原作の「ウィルヘルム・テル」を出したドイツ語の部では、監督の小谷恵一郎助教授が新婚ホヤホヤ。学生たちの猛練習を指導して、結婚式の翌日から、毎晩家へ帰るのは夜中の十二時、一時、ときには二時ちかくというはげしさで、新婚の夢どころのさわぎではなかったという。この先生は、ドイツ語担当教官として高商に勤務中の昭和八年、病を

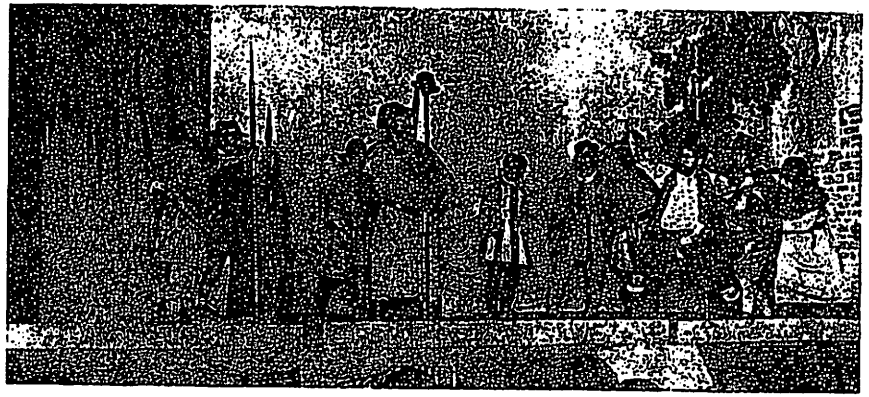


英語劇「スレッド・オブ・スカーレット」

えて、若くして世を去られたが、当時手をとるようにして指導を受けた学生たちの、ドイツ語劇への回想が、そのままこの先生への追慕ともなっている。

外語劇がはじまったのは、大正十五年秋、白堊の本館が落成した開校祝賀の式典のときからだ。その行事の一環としてこの年の十月二十六日夕、本館の講堂で、英語――「アブラハム・リンカーン」（ドリンクウォーター作）、「スレッド・オブ・スカーレット」（ベル作）、ドイツ語――「アルト・ハイデルベルク」（フェルスター作）、フランス語――「群盲」（メーテルリンク作）の劇が上演され、支那語は「帰去来之辞」の朗読が行なわれた。観客席は、富士見ヶ丘付近の市民や、学生のガール・フレンドたちでもあろうか、女学生らしい若い娘さんたちの、色とりどりの洋服や着物姿で、超満員の盛況だった。

しかし、外語劇が本格化したのは、むしろ翌昭和二年からのことである。というのは、当時左翼思想の抑圧にもっとも強硬な態度をとった岡田良平の文相時代（大正十三年から昭和二年）には、学生劇も、学生の文化活動の政治化、左翼化の温床として文部省からにらまれていたからだ。現に、隣組の横浜高工では、大正十三年まで、やはり高工名物として市民の人気を博していた、同校開校記念祭の学生芝居を、文部省の規制で



ドイツ語劇「ウィルヘルム・テル」

廃止し、学生を納得させるために、そのかわりとして煙洲校長が、当時から世界的な名器のほまれ高かったベヒシュタインのピアノを、大枚六千円（いまのカネにして約五百万円）を投じて講堂に備え付け、音楽を奨励したといういきさつがある（前掲『煙洲残筆』）。高商一回生の高工での間借り時代に、高工生たちが毎週土曜日には音楽会を開き、フェリス女学校などの女学生たちを集めては高商生をうらやましがらせていたのは、まったく、このピアノのおかげだったのである。その後高工が、学生のオーケストラまで持つ音楽水準の高い学園に成長したのは、岡田文相の学生劇抑圧のおかげ？　ということにもなる。

そんなわけで、高商の外語劇も、岡田文相がまだ健在だった大正十五年の第一回は、舞台装置や衣装などにも、控え目にした自己規制のあとがうかがわれたが、翌昭和二年からは、築地小劇場から新劇の衣装をそっくり借りてきたりして、本職そこのけのものに発展していった。しかし、アマチュアはあくまでもアマチュア、とりわけ、出場人物に女性がいる場合が、ことだった。戦後、大学になってからのように、女子学生の手を借りられるわけではないから、女形を募集しなければならない。昭和二年上演の中国語劇「終身大

外語劇の観衆

耶」の場合がそうだった。女中役に三人の〝女優〟が必要だが、なかなかなり手がない。やっと引き受けてくれた三年生（二回生）のS・Gは、セリフをいわせろ、という条件つき。そこで、監督の中国語担当教官武田武雄教授が、本来セリフのないところに急遽セリフを突っこんでの苦心の作となった。

同時に上演されたドイツ語劇「ウィルヘルム・テル」でも、爆笑がわいた。前記のドイツ語担当小谷助教授が、ハネ・ムーンを犠牲にして指導に打ちこんだ因縁の芝居である。いよいよ劇は、テルが悪代官の命令で、自分の子供が頭上にのせたリンゴをまとに、弓を射るヤマ場にさしかかる。ところが、子供役になった三年生のA・Sが絶句してしまって、どうしてもセリフがでてこない。舞台のうしろのほうに黒子役で控えた小谷監督が、一生けんめいセリフを教えるが、すっかりあがってしまったA・Sの耳に入らないらしく、かれは、手にしたリンゴを上げたり、下げたりしているうちに、ついに自分から吹き出してしまった。満場ワーッというかん声。学生劇の愛嬌のあるところである。

翌年のドイツ語劇「ファウスト」でも、さいしょのほうのファウスト博士の書斎の場で、地霊が煙とともに忽然とあらわれたまではよかったが、煙を出す花火の煙硝が強すぎたせいか、物すごい顔にメイクアップした地霊役の学生が、思わず「ハックション」とクシャミをしてしまった。そこは、地霊が厳粛に „In Lebensfluten, im Tatensturm, wall' ich auf und ab." （生命の潮流、行動のあらしのなかで、われは浪立ち、また静まりかえる）というべき場

面だったが、思わぬクシャミのアドリブで、たちまち喜劇的ムードがわき、大喝采がしばし鳴りもやまなかった。二回生I・Tの追想から、当時の外語劇舞台裏の情景をしのんでみよう。

「出演者は緊張のなかにも、何となくうれしそうにメイクアップにとりかかる。でき上がったものは、どことなく毛唐くさい顔になる。支那語劇では婦人になる人もあり、手にまで白粉をつけて、言葉まで何となくやさしくなる。ドイツ語劇にも〝女〟が出演する。美しく化けている。『男でさえ、ちょっと手入れをすればこんなに美しくなるのだから、女が美しく見えるのは無理はないねえ……。それで美しくないのはよっぽどだよ』と、妙なところで名言をはく。自分もウドン粉を頭につけて白髪にし、ニカワを顔につけてつけヒゲをする。なかなか痛い。」（『横浜高商学報』第二十号、昭和四年十一月二十日、第二回卒業生・市川俊次「思い出を語る」）

こうして昭和四年（一九二九年）には、ドイツ語の部でシラー原作の「群盗」が上演され、この年、二年間の在外研究を終えて帰国したばかりの渡辺輝一教授が、観客席にすわり「群盗」の主役を演じる紅顔の三年生、のちの母校教授越村信三郎をじっと見つめていた。越村は渡辺教授が在外研究に出発したあとの入学生だったから、このときが両教授はじめての出会いであったと、のちに渡辺教授は記している。翌昭和五年の十一月二十二日開催された外語劇は、西村稠教授の開会の辞にはじまり、フランス語――「ジャン・ヴァルジャン」（ヴィクトル・ユゴー原作）、英語――「酒場の夜」、中国語――「韓信の死」（長与善郎原作）、ドイツ語――再び「アルト・ハイデルベルク」を上演、中国語劇原作者の長与氏が当夜わざわざ観賞にこられ、スペイン語の部は、スピーチが行なわれた。さらに翌六年は、スペイン語――「罪は若きにあり」、ドイツ語――再び「ウィルヘルム・テル」、フランス語――「アルルの女」、英語――「息子」、中国語――「鴻門之会」と上演され、外語劇はその後も長く、開校記念祭のメイン・イベントとなった。

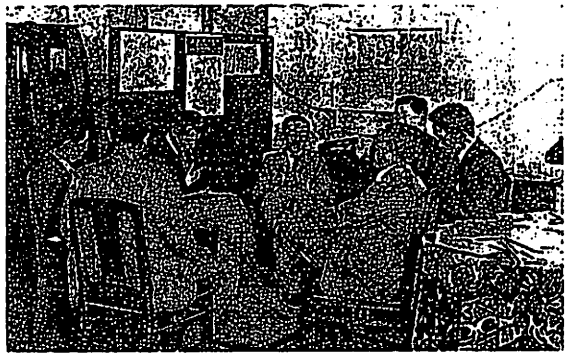
7　師たちの、そして師弟の語らい

教官室のふんい気も、前記の三・一会事件のときのような極限状態は例外として、田尻校長の家族主義のムードに包まれ、大へんなごやかなものであったらしい。まだ弘明寺での仮住まいだった開校の年の五月から、だれかの発議で教職員昼食会が開かれ、食堂の器具は、みなが基金を出し合って買いそろえた。何しろ震災翌年のまだ物資不足がつづいていたころのことで「六月末のある暑い日であった。むやみにからいライスカレーがつくられ、涙が出るほどで皆々てこずった」（『横浜高等商業学校二十年史』、小幡孫二教授「回想」）こともある。

富士見ヶ丘に移って、田尻校長が教官食堂に、日本郵船の国際船できたえた一流の西洋料理調理士を雇い入れてからは、そんなこともなくなり、食後のひとときは、教官たちにとってかけがえのない自由な語らいの場となった。そんなとき、さわやかで、ほほえましい笑談の雄は、フランス語の時田教授や、ドイツ語の小谷助教授であり、ユーモアにあふれたその語り口で、教官たちをいつもたのしませていた。小谷助教授はまた、流行の歌謡曲を微吟するのが得意だった。当時毎年四月下旬には、入学試験の慰労を兼ねて教職員の懇親旅行会があり、富士見ヶ丘から何台かのタクシーに分乗して、日光、鬼怒川方面とか、銚子から鹿島、香取のほうまでドライブしたものだ。ある年の春、伊香保温泉へ行ったときのこと、例によって三人ぐらいずつにわかれて乗ったタクシーが、関東平野を秩父の山に向かって突っ走る途中、小谷助教授は、乗り合わした渡辺輝一教授らに、当時のヒット曲「わたしゃ夜咲く酒場の花よ」というのを教え、みんなあきもせずに大声で合唱をつづけたこともあった。こうした面では、古きよき時代であった。太平洋戦争中、田尻校長辞任のあとを受けて母校の校長となった岡野

鑑記教授もかつて「あれほど打ちとけた仲間同士の旅行は、今後一生を通じて、おそらく他の社会では経験することはできまいと思う」（前掲『横浜高等商業学校二十年史』、岡野鑑記教授「富士見ヶ丘の追想」）と記していた。

高商が弘明寺の仮住まいから富士見ヶ丘に移ってまもなく、ガランとしたグラウンドの一角に、軟球ながら教職員用のテニスコートができた。そこの定連は、学友会の庭球部長もやっていた渡辺輝一教授や、その当時一年ほど中国語を教えていた川添（のち芝田と改姓）研三講師らで、放課後、はるかに見える富士山の裾野が夕陽を背負って壮大なシルエットを浮かびあがらせ、やがて白球が見えなくなるまでラケットを振ったものであった。ビッショリ汗を出して、ノドがかわいたところで、これらの若い教官たちは、帰りみち、当時吉田橋のたもとにあった「かねの橋食堂」に立ち寄り、ドイツ・ビールでノドをうるおした。そのうまかったこと、渡辺教授はいまだにその味を思い出すという。



教官室の休み時間

吉田橋は、日本でさいしょにできた洋式の鉄骨橋で、できた当座〝かねの橋〟として珍しがられ、全国から見物人が押しかけたほどであった。その下を流れていた大岡川も昨今は埋め立てられ、地下鉄工事や高速道路工事で、橋そのものも取っ払われてしまって、いまや見る影もなくなってしまったが、大震災から二年後のそのころは、そのたもとに橋の名前をとったバラック建築の前記大衆食堂があり、そこでは、ハンブルグで四合ぐらいのビン詰めにしたドイツの輸出ビールが飲めたのである。第一次大戦の敗戦国であったドイツは、そのころ自国製品の輸出にドラ

イブをかけて、経済の復興を急いでいたので、ドイツ・ビールもその一翼をにない、はるばる極東の港町・横浜にまで、進出していたのである。

戦前の、いわゆる文部省直轄学校だったにもかかわらず、教官室の空気が民主的だったことは、開校まもないころの文部省在外研究員派遣問題の処理にもあらわれている。戦前の官立専門学校の地位は、戦後の新制国立大学学部のそれよりも、実質的にはるかに高いといっていいほどのものがあり、官立専門学校は、旧制大学の学部と同様、毎年ひとりの教官を満二年、文部省在外研究員として海外留学に派遣する権限を与えられていた。横浜高商の場合、当時教官陣の最長老は、田尻校長の東京商大での同級生で、校長のいわば相談相手として赴任してきた古館市太郎教授で、同教授は着任後四年目の昭和二年に、在外研究員に内定し、すでに出発準備の内命も受けていた。その矢先きに、渡辺輝一教授ら東京商大出身の少壮教官連が結束して、古館教授の在外研究員辞退と、若手教官の繰り上げ派遣を要望したのである。当節流にいえば、ちょっとした若手造反ということにもなろう。古館教授自身が後日『富丘会報』に書かれたものから、当時の模様を再現してみよう。

若手教官連は「老生（古館教授のこと）はすでに完成せる長老教授だから、いまさら留学の必要が薄い、それよりもむしろ、若手教授にこれを譲ってもらいたい、さすれば今後、順送りにみな二年ずつ留学期がくり上がり、学校教授団の陣容がそれだけ早く整い、大なる効果をきたすという理由のもとに、熱誠なる要求を老生に迫ったのである。老生は内心はなはだ驚き、かつ、一身上の将来について随分考えさせられたが、これら親愛なる人びとのためにも、学校発展のためにも貢献するところ大なるを思い、やがて老朽の域にいたるべき運命を覚悟して、ついにこれを承諾して、渡辺教授を繰り上げ留学せしめた。」（『富丘会報』第六号より）

田尻校長も、片や東京商大以来の親友のことではあるが、若手の〝熱誠なる要求〟にも一理ありと考え、渡辺

教授の留学に最後の断を下したものであろう。しかしその田尻校長も、古館教授に東京高等師範学校から兼任講師の申し込みがあったとき、また、統計学担当の森田優三教授が東京商大から兼任講師の交渉を受けたとき、いずれもこれを断わって、専任教官の他校兼任を禁止する方針を、あくまでも貫いた。これが教授団の研究向上に役立ち、学園の発展に寄与したことはいうまでもない。

師弟の語らいの場の最たるものは、ゼミナールであった。さきにも述べたように、横浜高商は開校以来ゼミナール制をとり、ひとりの教官が多くても十人内外の学生を受け持って、専門研究の指導ばかりか、教養一般あるいは人生問題の相談相手にもなる、きわめて特色のある教育を行なったのであった。一週一、二時間という短い時間ではあったが、ゼミナールを通じて、教官と学生とのあいだには、打てばひびくような人間関係が形成されていった。

たとえば、大正十五年、一回生が三年のころ渡辺教授のゼミは学生数名だったが、時には、当時学校の正門下にできたばかりの、粗末な三角屋根を持った喫茶店が、ゼミナールの場所となった。一ぱいのコーヒーをすすりながら、講義とも談話ともつかない気楽なふんい気だったが、フリードリッヒ・リストの部厚な『国民経済論』の英訳本をテクストにして、学生たちとあまり年のちがわない教授が、リストの説くドイツ民族資本の擁護と産業発展のための保護経済政策の必要性を、熱っぽく解説する官業に、学生たちは耳をそばだてたものだった。

みんなのこづかい銭がなくなった日などには、先生のおごりで、コーヒーを飲みながらのゼミナールになることもしばしばだった。学問的な探求よりも、そうした暖かい人間味が若い教授の身辺に感じられて、その後の学生たちの人間形成のうえに、ふくよかな影響を与えてきたと、後日そのゼミナリステンのひとり一回生A・Kは回想している。教官のほうも、学生の気持ちにとび込んできた。財政学を教えた岡野鑑記教授は、次のように述

懐している。

「一週一回のゼミナールは、時間的には不充分であったが、テーブルをかこんで十四、五人が親しく向い合うと、私の全身には期せずして清新の気が満ちあふれてくるのを覚えた。教室でのようなバラバラの気分ではなくして、お互いの心と心に血が通ってくるのを感じた。私は夕やみせまるのも忘れて、時局を論じ、理想を説いたものである。」（前掲『横浜高等商業学校二十年史』）

派手で人気があったのは、経済史の徳増栄太郎教授のゼミであった。後年、国大に昇格のさい、初代の経済学部長となる同教授は、大正六年東京商大を卒業、当時ロンドンの在外研究から帰朝したばかりで、髪をオールバックにしたさっそうたるハイカラ教授であった。教授は生粋のハマッ子、伊勢佐木町から少し入った福富町の老舗・徳増紙店のおん曹子で、神中（県立横浜第一中学校、いまの県立希望ヶ丘高等学校）出身だったところから、そのゼミナリステンも神中出が多く、ロンドン仕込みのフェビアン協会史を説く教授の話に、すっかり魅了されたものである。

そうしたゼミテンのひとり三回生S・Sは、「卒業のとき、ゼミナール一同が磯子の料亭で打ち上げをやり、会費はいくらだったか、芸者をあげてさわぎ、一晩とまったこともある。遊びかたも先生に教わったようなもの」と述懐している。先生自身も、戦時中に「自分も若かったし、学生の方も近づきやすかったせいもあろう。ゼミナールなぞは時間を超越して、うす暗くなって会食につづくという風だった。それがいつのまにか『怖い先生』になってしまったのは、うたた感慨なきをえない。型にはまった先生となってしまったらしい」（前掲『横浜高等商業学校二十年史』、徳増栄太郎教授「二十年の『山』の生活」）と記していた。その徳増教授も、昭和三十八年すでにこの世を去った。

ゼミナールばかりでなく日常の、むしろ人間的な影響の面で、学生たちに大きな足跡を残した人に、保険学担当の故岩本啓治教授がいる。喘息持ちであった先生が、昭和の初年には薬ビン片手に、羽織袴のいでたちで、のちには浅田飴をなめながら、洋服のズボンにバンドがわりの兵児帯をしめて「諸君、体を丈夫にせにゃいかんよ」といいながら、病を押して講義をつづけられた姿は、卒業生のだれしもに強い印象を残している。清廉潔白にして温容なその人がらから語られる処世訓が、純粋な若ものたちに〝本もの〟としての感動を呼び、一回生のA・Sは「（先生は）人間は努力が第一だよとよくいわれたが、保険の講義よりもその一句が、三カ年を通じて私の頭に深く印象づけられている」と、のちに記している。

大正十五年、あの三・一会事件の起こりはじめたころ、同級生の受験資格復活要望を引っさげて訪れた一回生のM・Sに「君たちの友情はまことにうるわしい。私に同年配の息子があったなら、君たちの運動に参加させていただろう」といって、励ましてくれたのは、この岩本教授であった。国語・漢文担当の栗林信朗教授のあとを受けて、生徒主事の職を兼ねていたころのことである。

その岩本教授が、きびしい一面を示したこともあった。あるとき、二回生の授業で教室に入るやいなや「だれかタバコをすっていたようだが、そんな不謹慎なものに、わが輩の尊い講義はできん。貧しい家を救うため苦界に身を売る芸妓でさえ、修業のためには血をはく辛さに耐えるのに、親の助けで学問ができる君たちは、しあわせ者だと思い給え」とお説教を食わせ、サッサと退席してしまった。教室内は禁煙だったわけだが、みんながあっけにとられているなかで「私はすっかり感動してしまい、これこそ尊敬できる真の教師であると思い、亡くなるまで親交を保たしていただいた」と、二回生Y・Zは追想している。同教授も去る昭和四十七年他界したが、戦後の学校には数少なくなったといわれる「教育者」のひとりであったということができよう。

師弟のコミュニケーションは、教室やゼミナールばかりでなく、これまでも述べてきたように、運動部や文化活動でも、それに劣らず密接であった。対高工野球定期戦が中止となった昭和四年、高商野球チームは、全国高等専門学校野球大会で初優勝をとげた。同年七月二十二日開かれた関東予選で、日大予科を破って関東代表の座をかちとった高商軍は、同月二十七日から甲子園で開かれる優勝大会に臨んだのであった。その第一戦は、前年の優勝校・同志社高商を相手とする準決勝戦、事実上の優勝戦とみられていた試合であった。八回裏まで両軍2対2の同点、九回おもて同志社の攻撃は二死満塁となり、バッターのボール・カウントは2ストライク・3ボール。しかも、前二打者を4ボールで塁に送ったあとだけに、高商軍は文字どおり乗るかそるかの関頭に立たされていた。

二ストライク・三ボールのあとにして
まなこつむりて神を念ぜり

野球部の副部長として、ベンチでこの刹那の緊張をともにした井上鎧三教授は、その心境をこのようにうたった。高商軍のピッチャーは、井上教授の祈りのこもった一球で同志社の打者を打ちとり、この裏高商は一点を入れて、3A対2で同志社を破り、さらに決勝戦で二高を破って、優勝の栄冠をかちえたのであった。

野球部の成りて五つ歳　今日の日を
うつつに見むと幾夜泣きけむ

優勝が決まって、同教授は、野球部をここまで育ててきた武石弥彦監督（教務課事務官）に、この歌を送っている。野球定期戦は富士見ヶ丘に多くの詩人を生んだが、井上鎧三教授もそのひとりに数えねばなるまい。同教授は昭和十一年から野球部長となったが、同十四年四月、定期戦を前に病をえて急逝した。享年四十一歳であった。

その直前まで、教授は病床にあって「早く球場に出て練習を指導し、今年こそは勝たせたい」と語っていたという。

田尻校長自身が、東京高商時代ボート部の選手として鳴らしたスポーツマンで、大の野球通だったが、横浜高商の出る試合以外はけっして興味を示さない。「よその試合では力こぶの入れようがない」といって、早慶戦でも見にいかない。そして時間があれば、高工との陸上競技試合にも応援にかけつけた。昭和二年の十二月初旬、高商の新人対国学院大学の野球試合が、横須賀協会球場で行なわれたときのこと。同年の最終試合で、肌を突きさすような師走の寒風に選手たちが縮みあがっていたところへ、田尻校長があらわれた。「きょうは最終試合ときいてやってきたよ。私がきたからきっと勝つ」という言葉に、選手たちは勇気百倍、快勝をとげたこともある。

8　学生たちのくらし

——下宿料、寮生活、同窓会のことなど——

高商一回生たちが、弘明寺での一年間と富士見ヶ丘での学生生活を送った大正末期から昭和初年にかけて、下宿料は二食つき、六～八畳間で月二十五円ぐらいが普通だった。いまの貨幣価値になおすと、二万円ちかくというところ。三十～三十五円となると、もう高等下宿の部類で、いつの世にも学生たちの大部分はギリギリいっぱいのくらしをしており、こういう高等組はごくわずか。なかには母娘ふたりの家で、おむこさん格の待遇を受け、卒業後もそこに幸福な家庭を築いた一回生もある。

一回生のA・Kは卒業後、当時根津財閥の支配していた南朝鮮鉄道会社に入ったが、その初任給が六十円、翌

年六十五円に昇給したが、その年入社してきた東大や商大出の初任給が六十五円で同額だったから、一年で大学出に追いついたわけ。私立大学の学部よりは、むしろ官立高専のほうが格が高いくらいの時代であった。そのころ、東京の柳橋で芸者を三人ぐらい呼んで遊ぶと、大体六十円ぐらいの請求であり、六十～七十円も出して作った背広は、生地もイギリス製で、相当のハイ・クラスだった。

大正の末期から昭和初年にかけては、ソ連の経済学者オイゲン・ヴァルガによって、第一次世界大戦後の資本主義の、いわゆる相対的安定期と呼ばれた時代であり、その間わが国では、高商一回生の卒業した昭和二年春に例の片岡直温蔵相の失言から端を発した金融恐慌が発生するなど、大正九年（一九二〇年）の大戦後恐慌以来、景気の下降局面がつづいていた。しかし「大恐慌」が勃発する昭和四年（一九二九年）ごろからの数年にくらべればまだましな時代であった。すなわち、その後昭和四年の十月に、ニューヨーク株式市場の大暴落をきっかけとして世界「大恐慌」が勃発し、これに前後してわが国では、浜口雄幸内閣・井上準之助蔵相による、いわゆる緊縮政策が開始されて、昭和五年一月には金解禁が断行され、不景気のドン底時代が現出したのである。

試みに、昭和九～十一年（一九三四～三六年）平均を1とするGNPデフレーター（総合物価指数）をみると、次表のようになる。

年次	指数
大正9年	1.84
10年	1.42
13年	1.46
14年	1.43
15年（昭和元年）	1.27
昭和2年	1.20
3年	1.21
4年	1.18
5年	1.03
6年	0.90
7年	0.93
8年	0.98
9年	0.97
10年	1.01
11年	1.04
12年	1.10
13年	1.22
14年	1.50
15年	1.89
16年	2.12
……	
45年	593.5
48年	731.0

そして、この〝井上デフレ〟からの脱出は、昭和六年十二月、犬養内閣の成立による高橋是清蔵相の金輸出再禁止、赤字財政による公共投資拡大の積極政策と、同年九月勃発の満州事変を契機としてしだいにそれにとって代わっていった軍需インフレーションによって、行なわれたのであった。

そんなわけで、三回生（昭和四年春卒業）のころでも、下宿料は前記と同じ水準か、少し安いくらいだった。応援団の副団長のとき〝血染めの選手激励演説〟で高商の名物男となった、前記のY・T（のちにI・T）は、学校坂下の貧民街に「三食つき二十五円」のはり紙を見つけ、これを二十三円に値切って住み込んだ。ところが、その下宿は、便所が、まだ中年の主人夫婦の寝室を通っていく奥にあった。しかも、その夫婦があまりにも仲むつまじいので、夜なかはついつい便所へ行くのがはばかられ、窓からジャージャーとやらかしてしまう。「遊びにくる学友が窓辺に腰かけるたびに、バカに小便くさいなあ、とつぶやかれ、苦笑を禁じえなかった」と、かれはのちに述懐している。

同じ三回生H・Kのメモによると、喫茶店で飲むコーヒーがワン・カップ十銭、映画三本立てで三十銭、変わったところでは、焼いもが一食分ぐらいで五銭、遊廓の泊りが本部屋、台の物つきで五円、回し部屋三円、伊勢佐木町の裏通り、曙町でのショートが一円五十銭。とにかく十円あれば、関外の待合に泊り、朝めしを食ってもまだおツリがくる時代であり、新築三部屋の家が毎月の家賃十八円から二十円で借りられ、「月給が三ケタになって嫁さがし」という川柳もあった時代である。

こうした若ものたちのくらし向きは、前記のGNPデフレーターの足どりでもわかるように、太平洋戦争が切迫するにつれてジリ高にはなっていったが、その後十年ぐらいは大きな変わりがなく、昭和九年、学校当局が行なった生徒生活費調査でも、学生たちの一カ月平均の学費、生活費は約四十円であった。第九回生K・Kのメモ

では、当時伊勢佐木町の中ほどにあった何とかいうしるこ屋では、天どんどんぶり大のいれ物に、三寸角ぐらいの部厚い餅が三つほど入り、あんこがどんぶりのふちからダラダラたれるほど大盛りにしたのが、一ぱい五銭。同じ佐木通り「かねの橋」に近く、森永キャンディ・ストアの横丁を入ったおでん屋「しまや」では、おでん山盛りで十五銭、ビールが三本一円。当時、高工生が行きつけの「野毛おでん」に対し、高商生のたまり場であったこの「しまや」には、キリッとして親切そうな明治かたぎのおやじさん夫婦に、笑うとエクボの深い、愛嬌ものの〝みっちゃん〟という少女がいて、いずれも大の高商ファン。学生たちはよく、ひとりまえ二円ぐらいでねばっては飲み明かし、朝めしもここの茶づけをかっこんで、富士見ヶ丘めざし駆けのぼったものである。

私娼街のあった前記の曙町は、学生たちがチョッピリ自賛の念もこめてか、別名〝親不孝通り〟と呼んで、安直な青春の処理場所にしていた。一方、明治以来浜の遊興史には欠かすことのできない本牧のチャブ屋街にも出没する軟派の学生があり、後日大会社の重役となる五回生のM・Tは、まだ一年生だったある夜、最上級の三回生に引っぱられてさるチャブ屋にあがり、その調度の豪華さに目を見はった。田舎から出てきたばかりで、当時(昭和三年四月)開寮したばかりの学生寮・富士見寮に入っていたM・Tは、むしろ硬派に属するマジメ学生の部類だったが、前記の先輩に「寮にばかりゴロゴロしていないで、横浜にきたからには、本牧ぐらいいちど見ておけ」とすすめられるまま、ついて行ったのだった。当時、震災後の焼けあとがまだあちこち残っているのとは対照的に、こうした岡場所が急ピッチで復興していたことが、強く印象に残っているという。その後も、この先輩にたびたびごちそうになっているうち、いざかれが卒業という段になって、卒業論文の作成を手伝わされたというから、この先輩もさすがは高商生、ソロバンはちゃんとはじいていたわけだ。

前記のように、昭和三年の四月八日から、寄宿寮「富士見寮」が開寮された。南寮、北寮の二棟で、一棟四十

完成まもない富士見寮

室ずつ、六畳間の一室にふたりずつ入って、合計八十名を収容、一年生のうち地方からきたものだけが入寮した。太平洋戦争に入ってから、二、三年生の委員少数が残るようになったが、それまではずうっと一年生だけ。寮費が年間二十二円、夏休みを除いて十一カ月の月当たりにすると二円、それに食費が月十五円ぐらいだったから、普通の下宿よりはもちろん割安だった。

それに、運動をやるにしても文化運動をやるにしても、寮が足場になってまとまりが早く、俗にいう「同じカマのめしを食ったもの同士」の人間関係が、容易に形成されていった。常時ふたりの先生が寮監として監督に当たったが、寮の運営はほとんど学生の自治に委された。寮内の教養娯楽、衛生等が、寮生選出の一名の委員長と十二名の委員によってとりはからわれ、食堂の献立も、毎週担当委員がこれを作成する。起床は午前六時(冬は六時半)、就床は午後十時半という寮則もあるにはあったが、これも実際は緩急自在。夜中の一時ごろまでガンバル猛者も少なくなく、電灯料がかさんで困る、と学校の会計課から文句をくらうこともしばしば。朝も、授業開始の予備鈴が鳴ってからようやくおめざめ、洗面、食事と急行列車でやってのけて、スリッパのまま教室に飛びこみ、結構間に合ったのだから、便利なものだった。寮雨をやらかすものもあったし、後述のように、ストームで気勢をあげる一年生たちもあった。こんな調子で、少なくとも今次戦争のはじまるころまで、寮生たちは、自由な青春の団らんを楽しむことができた。

さて、昭和三年五月のある日曜日、木の香も新しい富士見寮の構内では、盛大に第

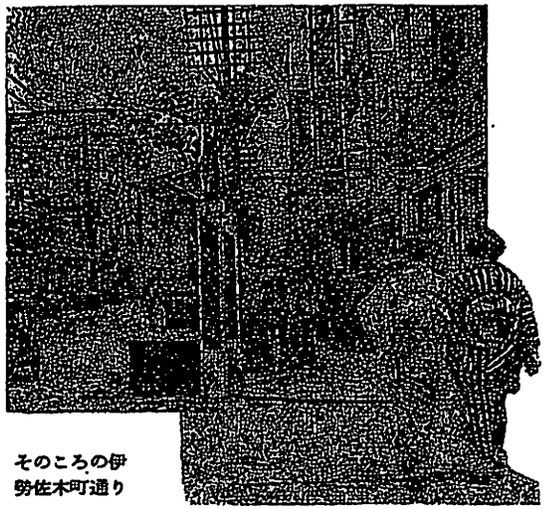
一回の寮祭が開かれた。「各部屋はそれぞれ、機智とユーモアに富んだ飾りをつけ、食堂は舞台となって『国定忠治』『父帰る』の劇が一日中上演され、集会室では、学校のマーク入りの女学生向きハンカチが売られた。この寮祭で、踊り用のそろいの浴衣を作ったりして、相当の巨額を要したが、これは、横浜市の財界人から寄付を募ったり、道行く人に軽飲食の切符を売りつけたりして稼ぎ出した。その結果、黒字財政となり、寮祭後慰労会を開くとはさすが商魂たくましいものだった。」（『横浜国立大学新聞』第三十五・三十六合併号、昭和二十九年六月二十日・七月五日、高商第五回大類武男「第一回寮祭の頃」）寮生の月例行事として、工場見学に行ったり、あるいは横須賀の軍港に保存されていた、日露戦争当時の東郷元帥の旗艦「三笠」を見学したあと、臨取山にハイキングするといった仕きたりも、後代の寮生に、つぎつぎと引き継がれていった。

しかし、二年生になると、新しく入ってくる一年生のために、寮生は交替しなければならない。そうした二年生らを大量に受け入れて、昭和十年ごろまで、第二寮的な勢力を誇ったのが、井土ヶ谷の同潤会（市営住宅）であった。

井土ヶ谷・同潤会住宅は、富士見寮の開寮より少し早く開設され、当時二年生だった四回生のK・Sらを中心に、約四十名がここに移り住んだ。木造二階建の一棟が、それぞれ、一階二戸、二階二戸の四戸にわかれ、学生が住んだのはもっぱら二階。階段をのぼって入ると、手まえに六畳、フスマをへだてて三畳の二間があり、それに台所、便所のついた、当節流にいえば2DKという構造。学生たちは、この一戸にふたりないし三人とわかれ住んだ。一戸の家賃は五円二十銭だから、ふたりで住んでもひとり当たりは二円六十銭ですむ。あとは食費ということになるが、さいしょのあいだは、グループで共同の自炊生活。交替で炊事当番になり、朝晩の食事を作った。しかし、何しろインスタント食品のような便利なものは何もなかった時代のことだ。ブリの照り焼が簡単に

できるとなると、おかずは毎日そればっかりがつづくといったぐあいで、半年ぐらいのうちにみんなくたびれてしまった。「しまいには、炊事当番の日はうんざり。どうやら栄養失調気味になり、ひもじいような毎日だった」というのが、四回生M・Mのいつわらざる述懐だ。

そこでみんなが相談した結果、一階の一戸に炊事のために夫婦ものを雇い入れて住まわせ、そこを共同食堂にして、ようやく生活が安定した。その費用が食費込み、ひとり当たり一カ月約九円、前記の家賃ひとり当たりを加えて、月十二円足らず、普通の下宿代の約半分ですんだ。同住宅の一角に銭湯があり、そこに交渉して、高商生の湯銭は一般の二割引きにしてもらったから、そういう諸雑費を加えても、月十五円もあればやっていけた。そうなると同潤会組は大いばりで、毎年春の富士見寮の新旧寮生交替期には、代表が寮に乗りこみ、同潤会への移住を勧誘した。昭和四年春には、前記の五回生O・Tら二十数名が、寮から同潤会住宅に移った。



そのころの伊勢佐木町通り

何しろ、常時四十人ぐらいの高商生がそこにたむろしていたのだから、活気がみなぎっていた。なかには、高商三年のところを四年も五年もかけて、みっちり勉強？する先輩もおれば、卒業後就職してからもそこから通勤する人もあり、そうした諸先輩が、夜はもっぱらワイ談の花を咲かし、後輩たちに〝社会学〟万般の指導をする。文部省が

当時、学生の〝赤化〟防止のため各学校に配付していた思想善導費も、同潤会住人たちのいいエサになった。住人たちは「思想を善導してもらおう」とばかり、今日は何のお祝い、明日は何の会と適当な名目をつけては、先生を招待し、鳥をつぶしてごちそうをつくり、飲み食い、かつうたう。先生も心得たもので、思想善導費から金一封を持参して仲間に加わり、大いに思想を善導？した。思想善導費が鳥や酒やお菓子に化けたわけ。文部省の学生部が、学生の思想対策に躍起の時代だったが、横浜高商での思想善導費の使いかたは、ゼミナールの懇話会に出したり、仏教青年会、キリスト教青年会等への補助金にしたり、のちには、その一部を皆勤者、精勤者への賞品に充てたりで（前掲『横浜商等商業学校二十年史』）、田尻校長の裁量により、わりあい幅のある出しかたをしていたようだ。

さて、このように威勢を跨った同潤会も、昭和九年ごろを境にさびれることになっていく。八回生O・Rのメモによると、富士見寮生の同潤会移住に好意的だった寮監の方針が、そのころから一変したのが原因だったという。そのいきさつについては、後に述べることにしよう。

9　貿易別科創設——就職難時代

——続・学生たちのくらし——

学生たちのひるまの生活の根拠地は、本館正門から左側にあった木造平屋の学生控所であり、そのなかの学生食堂であった——昭和二十年の横浜大空襲でここも焼け落ち、国大になってからその跡に、プレハブ式の大教室がつくられたその場所である。控所には各自の靴箱があって、みんなはそこで靴やゲタを上ばきにはきかえ、教

室にいく。学期末試験の日程や就職の申込みといった、学校側からの〝お達し〟がはり出されるのもそこであり、故郷からの便りやガールフレンドからの手紙を受け取るのも、そこの郵便受けであった。

高商生が弘明寺の高工から富士見ヶ丘に移ってから、白壁の本館が完成するまでの一年あまりのあいだ、学生控所が臨時の教室に使われていたから、そこが本来の機能をとりもどし、学生食堂が店開きするようになったのは、ようやく昭和二年になってからのことだった。業者に委託して食堂がはじまるのに先き立ち、学生による消費組合が発足した。中心になったのは、学校新聞の主筆になる前記のS・Sたち二回生だった。文房具と学用品、書籍の販売はそれぞれ出入りの業者を決め、市価より安く売らせることにしたが、問題は食堂。それまで学生たちは、学校の正門まえにあった私営の食堂「ヘルメス」にかよっていた。ヘルメスは、構内食堂ができれば当然、自分のところが指定されると思いこんでいた。しかし、S・Sらは経済学を学ぶ学生、ヘルメスにしろ財閥にしろ独占は弊害がある、競争原理をはたらかせて、できるだけ安くてうまいものを学生が食べられるようにしなければならぬと考え、食堂の業者は一般入札にした。その結果、ヘルメスは落札できなかった。学生はあいかわらずヘルメスにもかようが、昼めしどきなどは、構内食堂のほうが便利で安いので、大部分そっちへいってしまう。ヘルメスのおやじは心おだやかではない。しぜん、消費組合リーダーのS・Sがうらまれる羽目になった。

便りはまだか（生徒控所・郵便受け）

このヘルメスのおやじというのが、こつい顔と体つきの男で、街の親分とかいわれ、いつでも身がわりにブタ箱入りする子分

を、何人かかかえているという評判だった。ある日、S・Sがヘルメスのまえを通って坂をおりかけると、

「おやじが出てきてボクに近より、肩で押しながら、『おい、おまえ、しゃれたマネをするというじゃねえか』『何のことだ?』とわざととぼけてきくと、『食堂のことだ』という。『あっ、あれか。学生一般の意見だからしようないじゃないか』と逃げた。『へんなマネをすると承知しねえぞ』とたたみかけてくる。『ああ、わかったよ』といって別れようとしたら、いっしょに下までいこうという。ちょうどそのころ、ヘルメス食堂の下段の畑地の空いたのを利用して簡単な弓場をつくり、学生が弓の練習をしていた。『おまえ引けるか』ときくから、『引いたことはないが、引けるだろう』と答えると、弓を渡してくれた。矢をつがえて引くと、腕がメリメリする。えい、ここで弱気を見せたらあとがめんどう、と思ったから、腕と肩の骨が折れそうに痛いのをがまんして、表情だけはかるがるした様子をつくろって一本放ったあと、『なんだ、こんなものか』と笑ってみせた。ところがおやじは、『おまえ、なかなかやるな』といって、それっきりすすめなかった。あとできいてみたら、六分の弓だった。普通、練習には四分の弓を使用するそうだが、おやじもコンタンあってのことだ。弓ははじめてのボクとしても、この場の行きがかり上、骨がくだけても、あとへは引けなかった。」(『昭三会々報』第四号、昭和四十二年七月、坂本四郎「六分の俠気は若気の至り」から)

また、同じ昭和二年の秋季運動会でのこと。場内整理係の学生が、ヘルメスの出店とささいなイザコザを起こしたのを伝えきいた例のおやじが「みんなS・Sのさしがねだ。こんどこそ奴をバラしてやる」と、子分どもを引き連れてかれをさがしまわっているという情報が入った。運動会の委員たちが心配して、運動会のおわるまで、S・Sを本館内の教室にカン詰めにした。ヘルメスの連中がいなくなったのを見さだめたあと、やっと連れ出してくれたが、あたりはもうすっかりうす暗くなっていた。

こうした先輩たちの苦心のおかげで学生食堂も軌道に乗り、カレーライス十二銭、カツどん二十銭、野菜サラダ十八銭といった値段で、学生たちの食べかつ ダベリの場となっていった。しかし、やがて独占の弊害? がでてきたのか、昭和六年ごろになると、校外の一般食堂より高くて、しかもサービスが悪いという学生の不満が高まり、同年六月はじめ、当時の三年生(七回生)一同が合併教室に集まって、実行委員を挙げ、消費組合の直営に切りかえを決議するさわぎにまでなった。当時は金解禁(昭和五年一月)後のいわゆる井上デフレのまっただなかにあり、諸物価も底をついた時期であったから、学生のフトコロもひときわさびしく、校外の一般食堂も値段が安くなっていたのかもしれない。ともかく学校側も放っておけないことになって、当時生徒主事だった下田礼佐教授らが食堂業者と交渉、カレーライス十銭、カツどんと牛どん十八銭、野菜サラダ十五銭、ハヤシライス十三銭といった値段に下げて、学生側の不満もおさまった。以来、数年間はこの値段がつづき、その後メニューに入ってきたハマグリどんぶり十八銭などは、だいぶ学生の好評を博したようで、十二回生のK・Tは、卒業後戦地に出て、空腹になってくるとこのハマどんを思い出したと、のちに記している。

いろいろなことはあっても、とにかく学生時代はたのしい。〝血染めの野球部選手激励〟で勇名をはせた三回生のY・Tは、秋の期末試験あけ休みを利用して、同級生三、四名と伊豆半島無銭旅行を決行した。学校を出発して一路東海道をテクリ、箱根の山で野宿、朝霧に包まれながら山道を行くすがすがしい気持ちを味わいながら、行く先き先きの寝ぐらは小学校だった。立ちのぼる温泉旅館の湯気にたまりかねて、旅館に頬みこみ、ロハで風呂に入れてもらったこともある。学生が大事にされた時代であった。「男女混浴の湯に入り、どっかの美しい若奥さんといっしょになって、すっかり興奮してしまい、じっと湯舟にひたりどおしの純情無垢なボクだった」と、かれはのちに記している。

四回生で、井土ヶ谷同潤会の住人でもあったK・Kは、ある日登校姿のまま、クラスメートとふたりで富士登山に行ってしまったり、昭和三年大ヒットした野口雨情作詩、藤原義江うたう「波浮の港」の歌にさそわれて、東京霊岸島から巡航船に乗りこみ、大島旅行を試みたりした。大島に行きつくまでが大へんで、観音崎灯台付近をすぎるころ船がにわかにゆれ出し、船に備えつけの空きカンをかかえて嘗息吐息だったが、やっとのこと元村に上陸し、三原山を越えて念願の波浮の港に到着。宿の一室から港を見おろしながら、同行した友人とふたり、心いくまで〝やれほんにさ〟と合唱したものであった。

しかし、かれらが富士見ヶ丘をおりて社会に巣立ったころから、世は未曾有の就職難時代に入っていった。失業浮浪者を意味する「ルンペン」という言葉が流行語となり「大学は出たけれど……」という映画が評判になった。金解禁によるデフレに加えて、一九二九年（昭和四年）十月、ニューヨーク株式の大暴落ではじまった世界大恐慌の波がかさなり、日本国じゅうが不景気のどん底に突き落とされた時代であった。日銀調べの労働人員指数（一九二六年＝一〇〇）は「一九二九年十二月の九〇・二から三〇年平均の八二・〇、三一年平均の七四・四と、労働者数は減少の一路をたどり、失業者は三〇年中に三〇〇万に達したと推定されている」（遠山茂樹ほか著『昭和史』、岩波新書）。東北地方の農家を中心とした、娘の身売りが大きな社会問題になったのもこのころであり、昭和五年（一九三〇年）には、東京に市営の身売り相談所が設置されたほど。都会の失業者の多くは、故郷の農村に帰ったが、そこでも、恐慌は猛威をふるっていた。「一九三〇年の五月に一一〇〇円であった生糸相場が、わずか一カ月のちの六月に七九五円になると、繭価はいっそう暴落して、三〇年九月には前年同月の価格のわずか三分の一となり、農家総戸数の四割を占める養蚕農家は苦境のどん底におちいった。そのうえ、十月になって米の予想収穫高が未曾有の豊作だとわかると、米価は暴落した。……（深川正米相場一石）は三〇年八月の三〇円五三

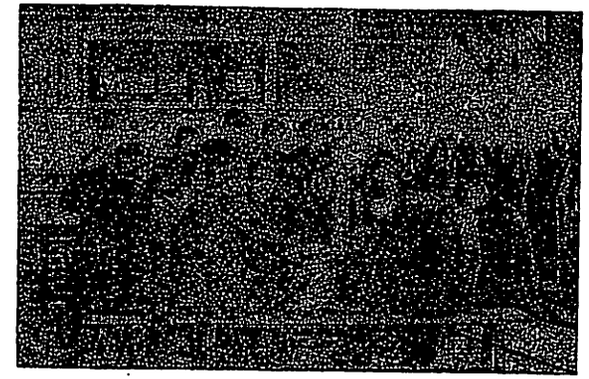
銭から三一年一月の一七円六五銭へと、実に四二パーセントの下落となった。……石あたり二七～二八円の生産費を到底つぐなうことはできず、『豊作飢饉』とよばれた」（前掲『昭和史』）。

横浜高商に貿易別科（南米貿易科）が付設されたのは、こうした大恐慌の前夜の昭和四年四月であった。修業年限は一カ年、その間に南米移住ならびに南米貿易に必要な学科を教授し、卒業後はただちに南米に移住するか、あるいは南米貿易に従事する者を養成するのが目的だった。この貿易別科の創設は、うちつづく不況による失業者の増大、不完全雇用の激化を緩和するひとつの施策という面を持っていた。『横浜高等商業学校二十年史』は、「不況は人口過剰現象としてあらわれる。この内地の過剰人口を海外へ移植させ、かねて国威伸張をはかろうとする拓殖計画が、政府によってとり上げられ、その移植民の現地指導者を養成する教育機関を、本校と長崎、山口の三高商に付設することになり……」と記している。

南米は新興国が多く、地域広大、資源が豊富で、わが国の有望な輸出市場と目され、かつ、労働力の不足を補うため移民を歓迎していたから、日本人移住の好適地と考えられていたのである。上記のような目的から、別科の学科目はおのずから特色があり、スペイン語（またはポルトガル語）を第一外国語として、毎週九時間を課し、英、仏語等は第二外国語とされ、また、農業大意および農業実習が必修とされた。入学資格は一般専門学校と同じで、定員三十名に対し、第一回は二百四十名の受験者があった。

貿易別科は戦時中の昭和十九年（第十五回）まで、合計五百五十名の卒業生を出して、同年三月、戦時学制改革（本科が「横浜工業経営専門学校」に転換したとき）により廃止された。

さて、上記のような就職難時代の到来で、昭和五年春卒業の高商四回生五十六名のうち、同年四月下旬ごろまでに就職、大学進学のきまったものは自営業を含め約百名にとどまった。同年四月二十五日付の『横浜高商学報』



ストーブかこんで（生徒控所での語らい）

第二十三号は「就職難を眺める」というコラムを設け、次のような学生の声を収録している。

○働くことは義務ではない権利だ。オレたちの労働権を確保しろ！（E・W生）

○働けど働けどわが暮らし楽にならざり、じっと手を見る。ぴったりくらあ。さがせどもさがせども働く口のなかりき、じっと見上げる。（M生）

○ある代議士が就職依頼者にむかって、「君は不幸にして学校へいったから失業したのだ」といったそうだ。むべなるかなである。（S生）

そもそも高商創設の時期が、第一次世界大戦後の不況期にぶつかっていたが、昭和四年ごろまでは、ともかく経済も、世界的に、いわゆる資本主義の相対的安定期とよばれた時期に当たっており、また、田尻校長のなみなみならぬ就職あっせんの努力が功を奏して、高商卒業生の就職率は、全国実業専門学校のなかでもずば抜けてよかった。例年、卒業一カ月後までに、就職希望者の九〇％前後が就職決定する成績をあげていたのである。しかし、昭和五年春は、田尻校長が折りあしく渡欧中という事情もかさなって、右の就職決定率が七四％に落ち込み、襲いかかる恐慌の嵐にはやはり勝つことができなかった。

第五回生の卒業した翌昭和六年春も、就職率は前年についで悪く「卒業式のまえに、たしか三十何名しか就職

がきまっていなかった年です。『謝恩会』も、正常な年のように中華街の大楼などというはなやかな会場でなく、当時のもっとも小さい百貨店のひとつ、伊勢佐木町相模屋百貨店のいちばん上の階にあった一般食堂（買物客が自由に出入りする）の一部を、ついたてでしきって、行なわれたほどでした。一般客がついたての横からのぞいたりしていました。しかし、戦後の現在とちがって、きわめて家庭的に、教官全部と係長以上の事務系職員、卒業生皆出席のなごやかさでした」（『昭三会々報』第三号、昭和四十一年五月、波辺輝一「回想」）と、波辺教授は回想している。

卒業生の初任給も、第一回（昭和二年卒）から第三回までは、最高百円から九十円、最低五十円、平均六十五円だったのが、第四回には、最高八十五円、最低五十円、平均六十三円となり、第五回では、最高八十円、最低四十五円、平均五十八円に落ち込み、第六回で平均五十五円に下がり、以来第八回生（昭和九年卒）まで、平均五十五円の水準がつづいた（前掲『横浜高等商業学校二十年史』）。「月給三十八円の大学出を募集したところ、応募者が多くて困った、などの話もききました」と、三回生H・Kも記している。別な資料でも、昭和七年ごろ、専門学校卒初任給三十円、大学卒五十円、師範卒四十五円（加藤秀俊ほか著『追補明治大正昭和世相史』）とあるから、横浜高商への評価は、不況のなかでも、一般よりかなり高かったということができよう。

前記の三回生H・Kは、卒業後一年浪人して、昭和五年春、日本ビクターに入社したが、初任給六十円、これが翌年一月には八十円に上がり、当時税金は月給百円から上にしかかからなかったから、当節のように所得税も社会保険料も引かれず、マルマルが手取り。失業時代だったが、就職しているものにとってはよき時代だった、と回想している。職にあるもの、ないものの格差がひらく時代でもあったわけだ。こうしてH・Kは、就職の三年後には、いまの国電新子安駅ちかくの便利なところに、二〇・五坪の家を千二百円（いまの約百万円）ぐらいで

新築することができた。借地で、地代は坪七十銭だった。夢のような話である。

こうした就職難時代が好転するのは、ようやく昭和八、九年ごろからであるが、それは、昭和六年十二月金輸出を再禁止した犬養内閣高橋是清蔵相の意図したような、平和経済による発展の道（長幸男著『昭和恐慌』岩波新書）ではなく、満州事変勃発（昭和六年九月）、上海事変（同七年一月）、血盟団事件や五・一五事件（同年一月～五月）という、血なまぐさい右翼テロリズムを伴った、軍国主義ファッショ化による軍需産業の開花への道であり、やがて太平洋戦争の開始につながる道程でもあった。

第二章のための資料

年表――昭和三年（一九二八年）～同六年（一九三一年）

年	月・日	本校関連事項	月・日	社会経済状況
昭和3年	3・	図書館規程制定、第二回卒業式を挙行、卒業生一三〇名	2・	日本共産党機関紙『赤旗』創刊（1日）、第一回普選行なわる（20日）
	4・	第五回入学式挙行、入学者一四五名、本年度より地方における入学試験廃止	3・15	共産党第二次大検挙（三・一五事件、千六百余人検挙さる）
	4・8	寄宿寮開寮、第一学年生八〇名を収容、生徒集会所開設さる	4・	労農党、日本労働組合評議会など結社禁止（10日）、大学、高校の社会科学研究会も解散を命ぜらる
	4・26	光井武八郎教授（商業英語担当）、在外研究のため渡英	6・4	日本軍人、張作霖を爆殺
	10・9	両陛下の御真影を拝戴	6・29	治安維持法改悪、死刑を追加
	10・17	第一回寮祭開かる	6・	ヒザ上のミニ・スカートはやる
	10・20	研究所季報第一号発刊さる	7・	内務省に特別高等警察（特高）設置さる（3日）、憲兵隊に思想係設置さる（4日）
	10・29	勅令第二五七号をもって、文部省直轄学校における学生監の補職が廃止され、生徒主事と同主事補各一名が置かる	8・2	第九回オリンピック（アムステルダム）で日本初優勝（織田幹雄の三段跳、鶴田義行の二百メートル平泳）
	12・15	第三学年生一三〇名、宮城前広場の親閲式に参加	10・30	文部省、学生の思想取締りのため学生課を設
	12・	ご大典記念に校庭に椎を植樹		

年	月・日	本校関連事項	月・日	社会経済状況
昭和3年			12・1	く 脱獄強盗出没 この年、野口雨情作詩の「波浮の港」大ヒット
昭和4年	3・23	天皇が横浜市の復興状況視察、本校教職員、生徒、一般市民とともに横浜駅構内に出迎う	3・5	元労農党代議士山本宣治暗殺さる
	3・30	第三回卒業式挙行、卒業生一三一名		
	3・	井上亀三教授(経営学担当)、在外研究のため渡欧	4・16	四・一六共産党大検挙、八百余名検挙さる
	4・	第六回入学式を挙行、入学者一四五名		
	4・	横浜高等商業学校商学会組織さる	4・	マネキン・ガール登場
	5・	徳増栄太郎教授(経済史担当)、朝鮮・満州へ出張	7・	浜口内閣成立、緊縮政策開始
	5・6	貿易別科設置、第一回入学式(入学者三九名)を挙行		
	6・1	夜学部は第十回講習会以後無期閉鎖さる	7・1	学生生徒の思想調査・指導のため文部省に学生部設置
	7・10	対高工野球定期戦無期延期となる		
	10・21	『商学』第一号発行	8・19	ドイツの世界一周飛行船ツェッペリン伯号霞ケ浦に着く
	10・22	この日を中心に開校五周年記念行事開催	10・15	政府、官吏の減俸を声明、二二日反対に会い撤回
		開校記念講演会に深井英五日銀副総裁「金解禁とその準備」、小泉信三慶応大学教授「マルクシズムとポリシェヴィズム」の講演あり	10・22	東京市社会局、知識階級の失業登録開始
	10・22	校歌制定さる	10・24～29	ニューヨーク株式大暴落、世界恐慌はじまる

年	月・日	本校関連事項	月・日	社会経済状況
昭和5年	11・11	田尻常雄校長、学事視察のため渡欧	11・1	失業者数三〇万と内務省発表
	11・	体育会発足	12・	東京市電争議
	3・	本科第四回卒業式(卒業生一五七名)、貿易別科第一回卒業式(卒業生三四名)を挙行	1・11	金輸出解禁
			1・21	ロンドン海軍軍縮会議開会
	4・	本科第七回入学式(入学者一六〇名)、貿易別科第二回入学式(入学者四〇名)を挙行	4・2	ロンドン条約調印、軍部右翼の反対起こる
	4・	消費組合の組織確立さる	4・	東京市電、鐘紡争議
	6・29	東京商大専門部との第一回対抗競技会を開催	9・25	生糸暴落、明治二十九年来の安値
	7・7	田中文相来校、視察	9・	農村恐慌深まる。青年将校桜会結成
	7・	教授要目をはじめて作成	11・14	浜口首相、東京駅で狙撃さる
	10・30	教育勅語渙発四十周年記念式を挙行	11・16	川崎の富士紡績争議で〝煙突男〟あらわる この年エロ・グロ・ナンセンス流行
昭和6年	2・5	天皇、皇后両陛下の御真影を奉遷し、改めて御真影を奉戴す	1・	田河水泡の漫画「のらくろ」、『少年倶楽部』新年号に登場
	3・	本科第五回卒業式(卒業生一三三名)、貿易別科第二回卒業式(卒業生二〇名)を挙行	3・	三月事件・軍部のクーデター未遂
	4・	本科第八回入学式(入学者一五〇名)、貿易別科第三回入学式(入学者二七名)を挙行	4・	重要産業統制法公布、若槻内閣成立
	6・1	対高工野球定期戦復活、三回戦となる	6・1	官吏の俸給減額実施
	9・	井上鎧三教授(経済原論担当)、在外研究のため渡欧	6・	満州で中村大尉殺さる
			9・18	柳条溝事件起こり満州事変勃発
	9・	野球部、来日したアメリカ・プロ野球団と試合	9・	イギリス、金本位を停止
			10・	東北地方冷害、凶作で娘の身売り増加
	12・		12・	犬養内閣成立、金輸出再禁止(13日)

○研究所学報発刊

研究所学報第一号が左記の内容で、昭和三年十月二十日発行された。

学報第一号目次

セリグマン「月賦販売研究」の研究　徳増栄太郎教授
最近英国産業における集中と独占　井上　亀三教授
内外重要経済日誌・昭和三年四月～九月、主要受入資料及定期刊行物目録、雑記

第二号（昭和四年一月発行）は、大竹緑教授の「法律と契約の凋落(一)」、下田礼佐教授の「南米経済に関する二名著を読みて」の二つの紹介論文、第三号（同年四月発行）は、小宮山敬保教授の「連結貸借対照表について」、第四号（同年八月発行）は、大竹教授の前掲論文のつづき、井上鎧三教授のウエイト「消費経済学」の紹介論文を載せた。学報はこの四号をもって、次項の『商学』に包括されることになり、廃刊された。

○商学会の設立と『商学』の発行

学校の機関誌を持ちたいというのが年来の念願だったが、卒業生および在校生のあいだからも発刊の要望が起こり、出版社の同文館（森山鎮二氏）が喜んで引き受けてくれたので、昭和四年四月、本校教官と生徒とを会員とする商学会が左記のごとく組織され、同会によって雑誌『商学』が発刊されることになった。

横浜高等商業学校商学会規則

第一条　本会ハ横浜高等商業学校商学会ト称ス
第二条　本会ハ雑誌「商学」ノ発行ヲ目的トス
第三条　本会ハ事務所ヲ横浜高等商業学校内ニ置ク
第四条　本会ハ左ノ会員ヲ以テ組織ス
一、特別会員　本校教官
二、普通会員　本校生徒
三、賛助会員　本校卒業生ニシテ本会ニ入会スルモノ
第五条　本会々員ニハ雑誌「商学」ヲ年二回頒布ス
第六条　本会ニ左ノ役員ヲ置ク
一、会長　一名
一、幹事　若干名
会長ハ会務ヲ総理ス
幹事ハ会長ヲ補ケテ会務ヲ処理ス
第七条　会長ハ校長之ニ当リ幹事ハ特別会員中ヨリ会長之ヲ指名ス、幹事ノ任期ハ二ケ年トス
第八条　会員ハ会費トシテ年額二円ヲ納ムルモノトス

会長　田尻常雄校長
幹事　下田礼佐教授、小宮山敬保教授、徳増栄太郎教授、大竹緑教授、井上鎧三教授

『商学』第一号は昭和四年七月十日発行され、次の内容を盛った二二三ページの堂々たるものだった。

商学第一号目次

論説

領国時代に於ける支那の対欧貿易に就て	下田　礼佐
連結貸借対照表に関する問題若干	小宮山敬保
農家経済に於ける労働力の自己搾取	井上　鎧三
CIF約款　ワルソー・ルール	不二門竜観
ヲールト・ホイットマン論	西村　稠

時論

最近の金解禁問題	森田　優三
賠償問題と独逸の経済	岡野　鑑記

資料及紹介

ミルス氏の物価変動研究	森田　優三
市販麻油の研究	南雲　庶博

○生糸経済研究

『商学』の発刊よりひと足先きに、生糸の経済学的研究団体が、井上鎧三教授を中心に、本校若手教授と本校卒業生を中心とする生糸貿易の学究的社員とによって結成され、昭和二年九月一日、機関誌『生糸経済研究』が創刊された。井上教授は生糸の経済的研究に没頭し、帝蚕ビル内に事務所を設けて、不定期ではあるが同誌の発行をつづけた。昭和七年三月以後は暫く休刊し、同十年に井上教授単独で『生糸経済研究所彙報』を発行したが、同十四年四月教授の急逝によって、この活動も停止されるにいたる。

○成人講座

文部省は思想対策のひとつとして、かつ専門教育の社会的開放を目的として、昭和四年に社会教育局を設置したが、これに先き立ち、昭和二年ごろから大学専門学校の教官を動員して、各地に成人教育講座を開設した。

本校も昭和二年十月に文部省からその開設を要嘱され、同月三十一日、左記のとおり南吉田小学校で同講座を開講した。講義時間は毎夕六時半から九時までだった。

講義要目と講師

(イ)　公民科
一、県政について　池田　宏知事
二、市政について　有吉　忠一市長
三、日常生活と法律　不二門竜観教授

(ロ)　商業科
一、横浜港の重要輸出品と其相手国の経済事情　下田　礼佐教授
二、金融と外国為替　森田　優三講師

(ハ)　財政科
一、普通選挙の実施と国民の財政知識　岡野　鑑記講師
二、地租要綱　岡野　鑑記講師

成人講座は聴講無料、聴講資格は男子二十歳、女子十八歳以

上で、在学中以外の者はだれでもよく、第一回は二百余名の申込みで盛会だった。その後隔年巻嘱を受け開講したが、その題目は左記のとおり時代の推移を物語っている。

（昭和四年十一月開講）

四日（月）　失業対策の種々相　　徳増栄太郎教授
五日（火）　緊縮、解禁、好況　　森田　優三教授
六日（水）　国債整理問題　　岡野　鑑記教授
七日（木）　ファシストについて　　渡辺　輝一教授
八日（金）　消費経済の合理化　　井上　鎧三教授
九日（土）　新民事訴訟法について　　不二門竜観教授

○貿易別科の学科課程

昭和四年度から開設された貿易別科（修業年限一カ年）の学科目と毎週教授時数は左記のとおり。

学科目＼学期	第一学期	第二学期
修身	一	一
商業通論	二	二
簿記	三	三
商業経済事情	四	四
貿易大意及外国為替	二	二
貿易実践・タイプライティング	二	二
経済大意	二	二
農業大意	三	三
移植民論	一	一
国際法	一	一
スペイン語	九	九
英語	三	三
体操	二	二
農業実習	毎週一回以上	
合計	三五	三五
	外ニ実習時間	

○消費組合設置

商商二回生坂本四郎氏の回想によれば、消費組合はすでに大正十五年、本館が竣工して、それまで仮教室に当てられていた生徒控所や柔剣道場が、その本来の機能のために明け渡されたころに、発足している。控所のなかに学生食堂と学用品販売などのコーナーを設けるためにも、消費組合設立の必要があったわけである（第二章　9参照）。当時の組合長は古館市太郎教授、副組合長井上鎧三講師、監事山崎与右衛門講師であった。

しかし、『横浜商等商業学校二十年史』によれば、消費組合の組織が確立されたのは昭和五年になってからと記されている。すなわち、同年四月、井上鎧三教授の指導のもとに消費組合の組織づくりが行なわれ、生徒が理事として教官組合長の監督のもとで、業務の執行に当たることとなった。資本金は組合員たる教職員の就任、または生徒の入学のさいに金三円を出資し、

退会または卒業のさい、これを返却するしくみとした。事業としては、書籍、文房具その他の学用品の販売、食堂の管理等を行ない、学用品の販売では、設立以来原価主義を採用、かつ、横浜市内相模屋百貨店と六分引き（のち、越前屋と八分引き）、丸善書店と五分引きの特約販売を行なっていた。しかし、やがて戦時下に入ると、昭和十七年四月以降は、まず書籍について書籍組合が定価売りを厳守することになり、また市内商店の割引販売の特典もなくなって、おのずから市価販売となっていった。しかも消費組合の名前も消えて、学校報国団生活部購買班という名称になるのである。

組織確立当初の組合規則は左記のとおり。

横浜商等商業学校消費組合規則

第一章　総則

第一条　本組合ハ横浜商等商業学校消費組合ト称ス
第二条　本組合ハ組合員ノ共益ヲ目的トス
第三条　本組合ハ事務所ヲ横浜商等商業学校内ニ置ク
第四条　本組合ハ横浜商等商業学校職員並ニ生徒ヲ以テ構成ス
第五条　本組合ノ組織ハ有限責任トス
第六条　本組合ノ財産ハ組合員ノ総有トス
第七条　本組合規則ハ組合員総数ノ過半数ノ同意アル時ニ限リ之ヲ変更スルコトヲ得

第二章　機関

第八条　本組合ニ左ノ役員ヲ置ク

組合長　一名
理事長　一名
理事　十二名
監事　五名

第九条　組合長ハ職員ノ組合員中ヨリ校長之ヲ選任ス
理事長ハ職員ノ組合員中ヨリ組合長之ヲ選任ス
理事ハ職員組合員ヨリ二名生徒組合員ヨリ各級ニ付一名宛之ヲ互選ス
監事ハ職員組合員ヨリ二名其他ハ生徒組合員各学年ニ付一名之ヲ互選ス

第十条　組合長ハ組合事務ヲ総理シ組合ヲ代表ス
理事長ハ組合長ヲ補佐シ組合ノ事務ヲ管掌ス
理事ハ事務ノ執行ニ当ルモノトス
監事ハ理事ノ職務ヲ監督シ会計ヲ監査ス

第十一条　役員ノ任期ハ一ケ年トス、但シ重任ヲ妨ゲズ
補欠トシテ新任シタル前項役員ノ任期ハ前任者ノ任期ノ残期間トス
生徒役員ノ選挙ハ毎年四月之ヲ行ヒ第一学年及貿易別科新入生ニ限リ五月ニ行フ

第十二条　役員ハ名誉職トス　但シ役員ハ正当ノ事由ナクシテ辞任スルコトヲ得ズ

第十三条　理事長及理事ハ理事会ヲ構成シ一般事業方針ヲ

決定ス

理事会ハ毎月一回定例会議ヲ開ク

第十四条　組合総会ハ通常総会ト随時総会ノ二種トス

第三章　事業ノ執行

第十五条　本組合ハ其ノ目的ニ従ヒ左ノ事業ヲ行フ

一、書籍雑誌新聞文房具運動具切手葉書煙草其他学用品日用品一切ノ販売

二、古書籍ノ交換仲介印刷取次

三、食堂ノ管理

四、洋服帽子靴及日用品ノ指定商人ノ監督

五、保健福利施設

六、其ノ他理事会ニテ必要ト認メタル事項

第十六条　本組合ハ其ノ事業ヲ執行スルタメ理事ノ担任事務ヲ左ノ如ク分ツ

一　仕入係

二　販売係

三　会計係

四　監督係

五　庶務係

第十七条　本組合ノ事業年度ハ毎年一月一日ニ始リ其年十二月三十一日ヲ以テ終ル

第十八条　本組合ノ事業執行ニ就テハ別ニ細則ヲ以テ之ヲ定ム

第四章　出資及計算

第十九条　本組合ノ基金トシテ組合員ノ加入ニ際シテ金参円宛ヲ出資セシム　但シ貿易別科生徒組合員ハ金壱円宛トス　組合員退職卒業又ハ退学ニ依ル脱退ノ際其請求ニ応ジテ元金ヲ返還ス

第二十条　本組合ハ毎年六月及十二月ノ二回決算ヲ行ヒ横浜高商学報ニ公告ス

第二十一条　本組合ハ原価主義ニ基キ純利益ハ当分配当セズシテ原則トシテ積立金トス　組合員ノ配当ニ代ツテ学友会ヘ寄附スル必要アル場合ハ組合員ノ平等ナル利用ヲ目的トス

第五章　解散

第二十二条　本組合ハ組合員ノ過半数ノ承諾アルニアラザレバ解散ノ決議ヲナスコトヲ得ズ

第二十三条　本組合ノ解散ナシタル時ニ於ケル残余財産ハ組合員ノ意志ニ従ヒ清算人之ヲ処分ス

第二十四条　本組合ノ解散シタル時ハ監事其ノ清算人トナルモノトス

附則

第二十五条　本組合規則ハ昭和六年七月八日ヨリ之ヲ施行ス

○本科入学志願者・入学者累年比較表

募集年次＼種別	入学志願者 中学	入学志願者 商業	入学志願者 計	入学者 中学	入学者 商業	入学者 計
昭和三年度	七〇三	三四五	一、〇四八	八六	五九	一四五
昭和四年度	九二五	三四八	一、二七三	八三	六二	一四五
昭和五年度	七七五	二七三	一、〇四八	一〇九	五〇	一五九
昭和六年度	七〇八	二二三	九三一	九六	五四	一五〇

○貿易別科入学志願者・入学者累年比較表

募集年次＼種別	入学志願者 中学	入学志願者 商業	入学志願者 計	入学者 中学	入学者 商業	入学者 計
昭和四年度	二〇五	三五	二四〇	三五	四	三九
昭和五年度	七二	二六	九八	二九	一一	四〇
昭和六年度	三七	六	四三	二二	五	二七

○卒業一カ月後における卒業生就職状況

卒業回次	卒業年月	卒業者数	上級学校入学者	自家営業従事者	就職希望者(A)	その他の者	需要申込員数(B)	B/A	就職決定者(C)	C/A(%)	未就職者	就職当時の給料月額(円) 最高	最低	平均
第一回	昭和二・三	一一七	一五	六	九五	一	二三二	二・七八	八三	八七	一二	一〇〇	五〇	六五
第二回	三・三	一三〇	六	七	一〇七	一〇	二一二	一・九八	九七	九一	一〇	一〇〇	五〇	六五
第三回	四・三	一三一	六	三	一二二	—	二三八	一・九五	一〇八	八九	一四	九〇	五〇	六五
第四回	五・三	一五六	一一	一三	一三二	—	二二五	一・七一	九八	七四	三四	八五	五〇	六三
第五回	六・三	一三三	一二	一五	一〇一	五	二六八	二・六五	九二	九一	九	八〇	四五	五八

○横浜高商貿易別科々歌（昭和七年）

作詞　須田良三
作曲　島津啓俊

（一）

曠野に　学びの華を訪ね
丘に登りて　憩ひ行く頃
喜びの胸は　永劫に輝く
嗚　月桂樹下に　幸の日　求めむ

（二）

港街の　灯　独り望みつ
南邦の空　胸に描く日
若人の血は　迸り出づる
嗚　遅しなき海よ　吾越え行かむ

（三）

柏木の陰　友と語りぬ
青草に臥し　不二を仰ぎて
そが若き日の　誇りに生きよ
嗚　慨しの金腰　忘れ難きかな